

北海道価値創造パートナーシップ会議 i n 釧路  
～新たな北海道総合開発計画に向けて～

日時：平成27年9月15日（火）14：00～16：30

場所：釧路市生涯学習センター（まなぼつと幣舞）

2階 多目的ホール

次 第

1. 開 会
2. 出席者紹介
3. 出席者からの活動や取組の概要紹介
4. 国土交通省北海道局説明
  - ・新たな北海道総合開発計画の中間整理の概要について
5. 意見交換
6. 閉 会

## 1. 開 会

○**小林開発計画課長** 定刻になりましたので、これから北海道価値創造パートナーシップ会議 in 釧路を始めさせて頂きたいと思っております。よろしくお願い致します。

本日は、皆様お忙しいところお集まり頂きまして、誠にありがとうございました。私、この会議の事務局、進行を担当致します北海道開発局の小林と申します。どうぞよろしくお願い致します。すみません、以降、座って進行を進めさせて頂きたいと思っております。

今日は大変良いお天気になって、気温も上がって、会場の中も若干ちょっと蒸しているような感じが致しますので、出席の皆様も、あと会場の皆様も、適宜上着を取って頂いて、会議に参加して頂ければと思います。

この会議は、新たな北海道総合開発計画の中間整理について、道内各地域の課題解決や活性化に日頃から活躍しておられる方々から御意見等をお伺いし、新計画の立案に活かすとともに、関係者相互の協力関係構築の促進を図る事を目的として開催させて頂くものでございます。

本日の会議は、マスコミも含めまして一般の方々に傍聴頂いております。

それから、本日の配付資料でございますが、資料1から6までとなっております。過不足等ございましたら、適宜、事務局の方にお申し付け頂きますようお願い申し上げます。

なお、本日の議事録及び資料につきましては、後日、国土交通省のホームページに掲載する事を予定しておりますので、予めご承知置きください。

よろしいでしょうか。

それでは、初めに、国土交通省を代表致しまして、岡部北海道局長から一言御挨拶申し上げます。

○**岡部北海道局長** 北海道局長の岡部でございます。

今日は皆さんお忙しい中、この北海道価値創造パートナーシップ会議 in 釧路に御出席を頂きまして誠にありがとうございます。

サブタイトルにも付いておりますけれども、新たな北海道総合開発計画に向けてという事になってございます。御承知の方々もおられるかもしれませんが、国として、北海道の総合開発をどういうふうに進めるかという計画を定期的につけておまして、これは北海道開発法という法律に基づいて、そういう計画を国が作るという事になっております。

新たな計画を作るために、今年の1月から計画の策定作業を始めておまして、ちょうど今、中間点に差しかかったところという事でございます。具体的には、国土審議会北海道開発分科会というのがあるのですが、そこのもとに計画部会というのを作らせて頂いて、そこで御検討を頂いているという事でございます。今日、小磯先生、西山先生にお願いしておりますが、お二方の先生には、その計画部会で、今、精力的に計画作りを頂いているところでございます。

そういう中で、今日は、道内の各地域の各界で御活躍されている方の意見をお伺いしながら、その計画作りに活かしていこうという趣旨で開かせて頂いております。全道でもこ

れまで7カ所で開催させて頂いておりまして、来週は旭川で開催する予定になっておりますけれども、こういう会議の場で様々な御活躍あるいは御経験をお持ちの皆様から貴重な御意見を頂きまして、計画作りに活かして参りたいというふうに思っております。

策定の目途と致しましては、来年の3月までに計画を策定して、最終的には閣議決定をするという計画でございます。後ほどの中間整理での報告もでございますけれども、北海道全体で人口が減少するという局面になっておりますけれども、一方で、北海道の元々の持っている資源であります農水産品が、非常に評価が高くなって、海外に出て行ったりとか、というような明るい前向きな話題もある。そういうちょうど時代の少し境目に差しかかっているところではないかというふうに思っておりますので、今後の北海道のあり方について、今日は御忌憚のない御意見を頂ければというふうに思っておりますので、よろしくお願い致します。

それから、実は、このパートナーシップ会議という名前にしているのは、こういうふう  
に地域の関係の方にお集まり頂いて、そこで頂いた御意見を活かして計画を立てるのですが、その計画を実際に推進する段階でも、今日お集まりの皆様にもまた色々御協力を頂いたり、御助言を頂いたりしながら、計画を作るだけではなくて、作った後の推進の時にもぜひ御参加頂きたいというふうに思っておりまして、そういう意味も込めまして、今日は皆様にもお集まり頂いたところでございます。

限られた時間でございますけれども、本日はよろしくお願い致します。(拍手)

○小林開発計画課長 それでは、報道の関係者の方々を始め、傍聴の皆様のカメラ撮影はここまでという事にさせて頂きたいと思えます。

## 2. 出席者紹介

○小林開発計画課長 続きまして、本日御出席の皆様を御紹介申し上げたいと思えます。

まず始めに、生田仁志様でございます。

石橋榮紀様でございます。(拍手)

伊関義和様でございます。(拍手)

大野良太様でございます。(拍手)

金子ゆかり様でございます。(拍手)

森崎三記子様でございます。(拍手)

それでは、続きまして、国土審議会北海道開発分科会計画部会の出席者を紹介致します。

小磯委員でございます。(拍手)

西山委員でございます。(拍手)

国土交通省の出席者を紹介致します。

岡部国土交通省北海道局長でございます。(拍手)

鎌田国土交通省北海道局参事官でございます。(拍手)

難波江北海道開発局開発監理部次長でございます。(拍手)

敷土北海道開発局釧路開発建設部長でございます。(拍手)

それでは、ここから先の司会につきましては、小磯委員にお願いさせて頂きたいと存じます。よろしくお願い致します。

○小磯氏 本日のパートナーシップ会議、釧路での会議、一応進行役という事で仰せつかりましたので、よろしくお願い致します。

私自身は今、御紹介頂きましたように新しい北海道の総合開発計画、この議論を進めております国土審議会分科会の計画部会のメンバーという事、その立場と同時に、この釧路の地では長く活動して参りました。今日も会場に懐かしい顔ぶれがたくさんおられますけれども、そんな関わりで進行役を仰せつかったのではないかなというふうに思っております。色々な意味合いで、せつかくのこういう国の計画作り、そこに地域の声を反映していく、しっかりとその計画の中に釧路の思いを伝えていくという貴重な場だと思っておりますので、皆さん方の協力で何とか進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

### 3. 出席者からの活動や取組の概要紹介

○小磯氏 まず、今日御参加の皆様方の自己紹介という形から最初スタートしたいと思います。日頃の活動とか取組、どんな事をしておられるのか、そういうところをお一人3分程度という感じで、ちょっと着席順で、生田さんの方からになりますけれども、御紹介頂ければと思いますので、よろしくお願い致します。

○生田氏 先ほど御紹介頂きまして、あいうえお順のトップバッターという事で、私の方から、まず自己紹介等をさせて頂きたいと思えます。

北海道標茶高等学校の校長を務めさせて頂いております。18年ぐらい前までは農業高校でしたので、標茶高校といえば農業高校かという印象をお持ちの方も多いかと思えますが、現在、総合学科という新しいタイプの高校として歴史を刻んでおります。

私も含めてですけれども、私たちが高校の時には、普通高校でなければ、あとは実業高校、工業高校とか商業高校とか農業高校とか、そういう高校しかなかったのですけれども、近年、もっと生徒の多様なニーズに応える学校を作らなければならないという事で、北海道も多様な高校づくりに取り組んでおりまして、その中の一つの総合学科である標茶高校でございます。もちろん財産としましては、農業の施設設備が非常に豊かでございますので、農業を中心とした学習活動をやっておりますが、農業高校ではないというところをひとつ覚えておいて頂きたいと思えます。

総合学科の説明を致しますと、それだけでも30分ぐらいになってしまうのですけれども、簡単に申せば、中学校段階で生徒がまだ進路は決められないだろうと、もっとじっくり時間をかけて、世の中のあり方、それから自分の生き方、自分の適性、そういうものをじっくり考えてから選択科目を選んで、そして自分の進路を決めていこうという事をでき

る学校として作られたのが総合学科です。ですから、1年の時には、世の中のあり方、それから自分の適性、自己理解ですね、それから職業ってどういうものがあるのか、働くってどういう事なのか、これを1年間かけて勉強致します。その中で、途中経過として、では、自分が世の中と関わっていくためにどういう進路があるのか、それは大学に行かなければならないのか、すぐ働いた方が良いのか、専門学校が良いのか、そういう選択肢を自分で見据えた中で、では、2年生からどんな選択科目をとったら良いのか決めていくというような手順をとります。そして3年生の時には、世の中で必要とされる様々な力が本当に身についているかどうかというのを発表するために、課題研究という時間でプレゼンテーションを行います。そこで、主に人の前で自分の考えをしっかりと説明するという能力を身につけたかどうかという事を評価して卒業して頂くと、そういう仕組みが総合学科の特徴となっております。

もう一つ、大きな特色としては、選択科目が一応グループ化されているという事です。このグループ化というのは、例えば商業系ですとか農業系ですとか、あるいは学校によっては芸術系ですとか、様々なグループの中で様々な選択科目が用意されているというふうになります。

そこが単なる単位制と違うところなのですが、本校の場合、どんな系列が用意されているかといいますと、お手元の方に資料3というペーパーがございます。これを後ほどまたご覧頂ければと思うのですけれども、その中で系列が三つございます。一つは文化理解系列、二つ目が地域環境系列、そして3番目が酪農・食品系列という、そういうグループ化された科目を設定しておりますが、これは取りも直さず、うちの学校の特色でございます。

ちょっと3分程度という事で、もう時間が過ぎてしまったのですけれども、一つこだけ御説明したいのですけれども、文化理解系列は、人と人を繋ぐ事を勉強致します。地域環境系列というのは、環境、自然について学びます。最後の酪農・食品系列については食を学びます。これが本校の特色になっていて、そして、その資料の後の方に新聞の切り抜きも付けてございますが、それぞれの系列の特色を表す取組を新聞記事としてまとめてございますので、後ほどご覧頂ければと思いますが、今回呼び頂きました中身と結構重なる取組をしておりますので、また後ほど発言の機会がございましたら、発表させて頂きたいと思っております。

本日はどうぞよろしくお願い致します。

○小磯氏 どうもありがとうございます。

それでは次に、石橋さんお願い致します。

○石橋氏 浜中町農協の石橋でございます。お手元のプロフィールのところにざっと書いておりますけれども、言ってみれば、地域の生き残りをかけて酪農に関する事は全て何でもやるという、そういう考え方で今まで取り組んできております。それが結実したのが、今年の農水の予算の中で大きくクローズアップされております畜産クラスターというの

は、実は私どもの取り組んできた事を網羅的にやると畜産クラスターなのですね。そういう事になっているという事でございます。

一つ一つの事例で申し上げますと、一番最初に取り組みましたが、酪農技術センターという、ある意味では科学的な見地から数字で営農を支援するための分析センターを作ったという事でございます。それが言ってみれば、ハーゲンダッツの原料として選ばれる元にもなっておりますし、成分無調整のホルスタインの40牛乳という、極めて超高級牛乳というのも、技術センターを作ったお陰で出来上がったものだというふうに思っております。

言ってみますれば、それは結果として、平成14年にBSE騒ぎがありました。その後に牛肉の安全性をトレーサビリティという形で、国がきちんと日本中の牛にイヤリングを付けるという仕事をした訳でありますけれども、私どもはそれを生乳できちんとやろうという事で、実は生乳のトレーサビリティを出せるのは全国で私どもの農協だけあります。そういう施設を持って仕事をしている。

更に、新聞等で御存じの通り、今日の課題にもなっておりますけれども、人が減って、なかんずく農業者が減っていく、酪農家が減っていくという状況が昭和50年代から続いている訳でありまして、それに対応するための人材育成事業としての研修牧場というものを平成の始めの頃に作りました。今はそれを近隣の農協、あるいは全道的にも全国的にも、そういう形で農業者の人材育成というものをやっております。遠くは九州宮崎県のハウス園芸の新規就農者を育てる事業も、私どもの研修牧場の仕組みを上手にアレンジして作られたものだというふうに思っております。

さらに、個別の農家だけではなかなか農業をきちんと続けていく事ができない時代に入りつつある訳であります。それだけどんどん減っている訳でありますから、それらをサポートする、あるいはそれらを支援するために、企業の参入もこれからは考えていこうという事で作りましたのが、「酪農王国」という異業種出資法人の生産法人を作りました。お陰様で、ここの卒業生が1法人、新たに私どもの地域で新規参入を果たしております。大型経営の酪農家が御主人の病気で急に辞めざるを得なくなった、しかし、それを個人で受け継ぐには極めて大き過ぎたという事もありましたので、酪農王国で研修中のある土木会社出身の社員を場長にして、新しく法人経営に参入して頂いたという事があります。

結果的にいえば、そんな形で現在の農業というのは、個人でもきちっとやらなければならない、そういうものもあります。それは、特に田舎においては、地域コミュニティーがどんどん小さくなっていくという事は、地域の生活のインフラがどんどん無くなってしまふのですね。そのためには一定の人口は確保していかなければならないという点から言うと、必ずしも大型の法人経営だけでは地域は成り立たないという事もありますから、個別の農家もしっかりと育てる、さらに大型経営にも参入して頂いて、生産基盤をしっかりと維持していくという事が、ある意味では、我々農業者の役割だろうと。それをきちっとコーディネートするのが農協の役割だというふうに私は思っております。

さらに、私は、世界一クリーンな環境で牛乳を生産しようという事で、今、環境整備に取り組んでおります。その一つが、緑の回廊という植林活動であります。さらに言えば、生乳を生産するために牛舎で牛を飼う訳でありますけれども、そこで出されるものは、全てきちんとクリーンにして地球にお返しするという事でございます。これも実は開発建設部の事業で実施しております、私どものところの農家の牛舎排水、家庭雑排水は全て全部クリーンにして浄化した上で地球にお返しすると、そういう事業を今展開中でございます。

いずれにしても、この地域で生き残っていくために必要なものは何でもやっというのが私どもの農協の基本的なポリシーでございまして、これからも皆さんにお世話になりながら、続けて参りたいというふうに思っているところであります。

○小磯氏 ありがとうございます。私も石橋さんとの付き合いは大変長くて、先ほどお話に出ていた酪農技術センターですか、15年前ぐらいに見せて頂いて、やっぱり生産された方が生産されたものに責任を持つという、この姿勢、ずっと貫いて活動しておられるという事を改めて感じました。ありがとうございます。

では、次、伊関さんお願い致します。

○伊関氏 平成20年12月から商工会議所の運輸交通部会長をやっております。略歴的には、1973年に、ここに書いてありますが、三ッ輪運輸という会社に入りまして、主に海上貨物の通関だとか船舶代理店だとか、それから海上貨物の集荷営業という事で、主に海の方の輸送を手がけておりました。

それから、ここにちょっと書いてありますが、釧路食料基地構想協議会というのがありまして、これは会議所が事務局を持っております。この食料基地構想協議会というのは、要は、この東北北海道の食料を大消費地あるいは海外へ届けるには、港を使いましょうと。港とヒンターランドの農林水産業をいかに結びつけるかと。林はちょっと食料ではないですけども、農水産業をいかに結びつけるかという、そういう構想でありまして、今一生懸命取り組んでいるところであります。

もう一つ、釧路港が国際バルク戦略港湾に、23年5月31日に指定になりました。ちょうど会議所の交通部会長を始めた時でありまして、実は市民、あるいは開発局さんにもものすごくお世話になっていますが、市民、行政、経済界が一体になって、市民の皆様から72,783筆の署名を集めるというような事で、釧路市民が一丸となって取り組んだ活動結果だというふうに思っております、地域としては大いに誇れる事ではないかなというふうに思っています。

もう一つ、食料基地構想協議会で、北海道がバックアップ拠点構想というのを取りまともて国に提言する時に、どうしても札幌、道央圏を中心に延長になりがちだった拠点構想に、食料基地構想協議会として提言をさせて頂いて、若干不満ではありましたが、ある意味取り入れて頂いたという事で活動しております。

とにかく、この地域、食料が中心だというふうに思っております。食料もただ作るの

はなく、消費地へ届ける、そういう役目が港湾、道路等々にあるのではないかというふう  
に思っています。

以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。今、伊関さんからお話があった食料基地構想、元々  
は備蓄というコンセプトで、昭和の時代から長く釧路で取り組まれており、私もお手伝い  
をさせて頂きました。どうもありがとうございました。

それでは次に、大野さんお願いします。

○大野氏 一般社団法人釧路青年会議所、そして、有限会社ZEN Style Dining代表として  
やっております大野と申します。

私はまず、地域の商業者として飲食業を展開しております。飲食業を展開している上  
で、先週、ちょうど新しいお店がリニューアルしたのですけれども、道東の、それこそ石  
橋さんのところにもかぶっている事なのですけれども、道東の酪農家さんをテーマにした  
お店を今回やりまして、北海道は皆さん御存じの通り、酪農が非常に盛んな地域なので  
すけれども、その中でも特に道東の方は酪農が、非常に乳質的にも優れているという事も  
ありまして、有名なチーズ工房が非常に多いです。逆に地元の方々がそんなに口にする機会  
が余りないような状況でありますので、そういった点も踏まえて、今、地元の方々にも味  
わって頂くようなお店をやったりですか、私も地域の商業者として地元のものを使って  
やっていくというような商売をしております。

また、「くしろ夕日ハイボール」というものを展開させて頂きまして、釧路青年会議所  
が3年ほどかけて、世界三大夕日という事で手がけて参りました夕日というものを使っ  
て、それをハイボールという形でブランド化していくと、そんなような活動をしておりま  
す。

また、釧路青年会議所、今年、政策担当の委員会に配属されておまして、非常に事務  
局の方には御迷惑をお掛けしましたけれども、裏表のカラーの大量の印刷をして頂きまし  
て、皆さんのお手元に配付されているかと思えます。我々、この釧路地域の人口減少な  
ど、その他様々な問題を解決するために、今年1年間活動している訳でありますけれど  
も、この地域の優位性を考えた時に、この地域、非常にやっぱり自然環境が豊かであらう  
と。その中でも、自然環境の中をもっと優位性を高めていくためにはどこに着目するべき  
なのかといったところを考えた時に、この冷涼な気候といったところを一つテーマに挙げ  
させて頂きました。

また、人口減少というところを考えてみますと、もちろん社会減に関しては若者が出て  
いかないようなまちづくり、そういった地域づくりをしていく、そういったところもあり  
ますけれども、特に地域の若い女性がここに残る事が自然減を食い止める一つの方法論で  
あらうという事を考えまして、では、地域の若い女性の雇用を生む、そして、その雇用の  
マッチングをしっかりとするような業種というのは一体どのような業種なのかという  
ふう考えた時に、医療産業に関しては、未だに需要も非常に多いですし、就労希望者も



多いという事で、ここを地域の優位性と、そして若者たちが望むであろう職業とを合わせたような形で健康といったところをキーワードにまちづくりを進めて行こうという事で、この提案資料を書かせて頂いております。これを全部説明すると非常に長いですので、ぜひ、資料の方に目を通して頂ければというふうに思います。

今日は、青年会議所の方から、本年度の担当の政策の委員も来ておりますので、ぜひ我々のお話を聞いて頂ければというふうに思います。

最後に、明日、実は我々、例会がありまして、今いらっしゃる小磯先生も明日例会に来て頂きます。「地方消滅 くしろ地域は生き残れるか？」という例会もありますので、ぜひ御参加の方もよろしくお願い致します。

以上でございます。

○小磯氏 ありがとうございます。JCの政策提言活動は私もお手伝いをしております。それでは金子さん、次をお願い致します。

○金子氏 釧路港おもてなし倶楽部副実行委員長、そして北海道建築士会釧路支部の女性委員長としてこちらの方に参らせて頂きました金子ゆかりと申します。本日はよろしくお願い致します。また、このような会議の席にお呼び頂き、発言させて頂けます事に御礼を申し上げます。ありがとうございます。

私どもの資料は、裏表1枚のカラーページとなっております。「市民活動で釧路を元気に！」という事で、皆様に少し活動を説明させて頂きながら、自己紹介とさせて頂きたいと思っております。

まず、釧路港おもてなし倶楽部の活動ですけれども、こちらは、釧路港おもてなし倶楽部という名前になる前に、耐震旅客船ターミナルの利用を考える会というのがございます。こちらの会議の中で、そこに出ていた会議の事を一生懸命考えている市民から、ターミナルができるのは良いけれども、それを活用してもっと釧路を元気にしていった方が良いのではないかというような趣旨もございまして、クルーズ船でやってくる方々を歓迎する事業を行う、そういった会を設けてはどうかという事で、市民の方からの発案で始まった会という事になっておりますが、その時に市民団体が色々入っていたのですけれども、そして開発建設部さんを始め釧路市さんなど行政の方々も一緒になって、官民一体となって釧路全体を盛り上げていきたいと思います。それも港を通して盛り上げていきたいと思いますという事で発足した会です。

今まで会が出来上がりましてから何年間か活動させて頂いたのですけれども、最近、去年、大変たくさん船が入って参りまして、二十三、四隻入ってきたという事で、残念ながら1隻抜港という事にもなりましたが、たくさん入ってくる船の皆様方をお出迎え、お見送りしながら、または、時間のある時といいますか、休日なんかですと、みんなでお祭り広場を設けて少し大きなおもてなし事業をしてみましようかという事でお祭り広場を設けるなど、そういった事もさせて頂きました。

その中で、私どもの方で、色々な団体が入って下さっているのもそうなのですけれど

も、他の団体とも連携しながら色々活動していきましようという事も目指しておりまして、国際交流ボランティアの会の方たちと一緒に外国船のお出迎えですとか、交流サロンというのを皆さんやっておりますので、そちらの方におもてなし倶楽部の方からも独自の事業を絡ませて頂きながら、幅の広いおもてなしができるようにという事で、色々活動しております。

裏を返して頂きますと、今度は建築士会というものの説明をさせて頂く事になりますけれども、建築士会という団体は、建築士法にも謳われております一般社団法人でございます。こちらの方は全国組織なのですけれども、北海道は札幌に本部がございまして、釧路は支部という事になっています。釧路の方では、職能を活かしながら建築士の地位の向上と、そして資質の向上という事で色々活動をしているのですけれども、市民の方々と一緒にまちづくりも考えていきたいという事で、こちらの方も自分たちの団体だけが何かをするという事ではなくて、連携しながらやっていきたいという事で活動させて頂いております。

平成23年の時に大きな東日本大震災のような大変な災害があったものですから、それを契機に防災の活動などにも取り組んでおりまして、開発建設部さん、港湾事務所さんとも一緒にワークショップをさせて頂いたりですとか、釧路市さんと協働事業という事で、一般市民の方を対象にしたDIGというのがございましてけれども、災害図上訓練、こういった事などをさせて頂いたりしています他、地域のイベント等にも協力して町の景観等を彩るような活動をさせて頂いております。

大変早口になりましたけれども、活動の方を御紹介させて頂きました。ありがとうございます。

○小磯氏 ありがとうございます。確か5年前、建築士の大会のお手伝いをさせて頂いた事を今思い出しておりましたけれども、大変幅広い活動をその後も展開しておられるようですね。ありがとうございます。

それでは森崎さん、お願い致します。

○森崎氏 釧路モカ女性プロジェクトの代表をやっております森崎三記子と申します。よろしくお願い致します。

「もっと・大きく・格好よく・ありたい」ウーマンプロジェクトの頭文字をとってモカと名づけました。先ほど金子さんのお話の中にもありましたが、平成23年3月ですね、東日本大震災があった後に、生きるという事をすごく考えられる方がたくさん多かったと思います。私もその中の一人でありまして、ふだんは富士見町にあるハローワーク釧路で、主に子育てですとか介護を担う、家事と両立しながら仕事探しをしたいという、主に女性たちとの個別相談をしております。その中で、小さな子供がいるとなかなか採用につながらなかったりとか、そういった悔しい思いを一緒にしている中で、ただ、すごく御本人、個人個人はとても元気だし、とても優秀だし、とても何か持っているものがあるのに、なかなかそれが実現できないという思いをしておりました。後ろに控えております副

代表もその中の一人なのですけれども、そんな人たち、点と点をつないで何か線にして、面にしてというような活動をしたと思ひまして、一番最後の資料にありますピンクの資料なのですが、今年版なのですけれども、ピンクは強い女性という意味で、釧路モカのイメージカラーにしております。

私どもの事業には大きく二つの柱があります。まず一つ目なのですが、ここに何気に置かせて頂いております釧路魚網タオルでございます。知っている人は知って頂いているかなと思ひのですが、まさに今、釧路の海に放たれている、サンマをとる実際の網でございます。この網を利用して、ぜひ釧路らしいものを作って何かお役にというか、自分たちの小遣い銭にならないかなというのが発想でございました。子育て中でなかなか仕事に出られない。だったら、うちの中で仕事をすれば良いじゃんという簡単な発想なのですが、それが私たちの活動資金になりました。会議室1つ1,000円、2,000円のお金を捻出するために、まずは頂いた網を使って、漁師さんがこの網で背中を洗っているという文化が元々あったようなのですけれども、それをぜひ釧路らしいものという事で作り出しました。それが内職に繋がりました。これを販売する事で、釧路モカに雇用が生まれました。そして、それが地域活性に繋がりました。それが小さな小さな団体なのですけれども、今年度とても注目して頂ける事になりまして、23年に設立してから、地元の報道を始め、全国紙の報道にもたくさん取り上げて頂いた事もあり、昨年度の北海道開発協会の助成金を取らせて頂いた事もあり、この場にお呼び頂いたのかなと思ひますが、これをぜひ釧路のお土産物として、釧路のお土産というのは7~10%ぐらいしかないという事をお聞きしました。これを全市民挙げて、釧路管内挙げて、ぜひ釧路のものにしたいと思っております。

残念ながら、活動の資金としたものですから、私どもの方になかなか、釧路モカが売り上げで儲かるというような仕組みになっていないというのが残念な事なのですけれども、その仕組みづくりも一緒に考えて頂ければ有難いと思っております。

二つ目の事業と致しましては、地方創生型の事業を昨年度から、26年度、27年度、釧路市の方から受託致しまして、人づくりという講座をやっております。まずは人をつくる事というのがすごく大事だと思っております。後ほどまたお話をさせて頂こうと思ひのですが、行政が作ったこれ程の壮大な計画を一人一人が自分の事として受けとめて、地域づくりをやっていく事が大事なのかなと思っております。

すみません、早口になりました。御挨拶とさせていただきます。

○小磯氏 ありがとうございます。就労支援という、地域で働く場、雇用の場を作り出す、大変難しい事ですが、果敢に挑戦しておられるという事で、ありがとうございます。

一応自己紹介という事でしたけれども、それぞれの活動を大変丁寧に御紹介頂きました。折角ですので、我々計画部会のメンバーも簡単にちょっと紹介をさせて頂ければと。西山先生からお願いします。

○西山氏 こんにちは。北海道大学の観光学高等研究センターという、ちょっと風変わりな名前の研究センターが北大にあるのですけれども、2006年、10年ほど前に出来たセンターで、日本の大学で観光の研究センターとしては唯一という事で、丁度小泉首相が2003年に日本の歴代の首相としては初めて施政方針演説で観光という言葉を使って観光立国を唱えられまして、それ以来、日本中であらゆる分野で観光という事が真っ当に扱われる時代が来たわけです。それで私ども、観光立国を政策として国がちゃんと進めるのであれば、国立大学にきちんとした研究センターを作るべしという大きな流れの中で、それが北海道大学に出来たという、そういうセンターが北大にあると、殆どまだ知られておりませんが、ぜひこれを機会にお見知り置き頂けたらと思う次第であります。

私、小磯先生と違いまして、元々九州の人間という事もあり、北大に参ったのも5年前の事ですから、釧路にも三度ほど伺っておりますけれども、全然顔見知りの方が一人もおられないという、アウェーというよりも、非常にちょっと寂しい感じで恐縮しておりますが、今日を境に皆さんに顔を覚えて頂いて、色々な事で議論させて頂いたり出来ればと思っておりますので、どうかよろしくお願い致します。

○小磯氏 ありがとうございます。私も簡単に自己紹介させていただきます。

私は、今日は計画部会のメンバーという事で参加しておりますけれども、今は西山先生と同じ北大で活動しておりますけれども、1999年から2012年まで13年間、釧路公立大学というところで皆さん方と一緒に活動させて頂いておりました。

実は、この部会で今議論している北海道の総合開発計画というのは、私自身がそれまで仕事しておりました旧北海道開発庁の計画部門に長く関わっていらしたので、非常に繋がり深い、そういう仕事でもあります。そんな色々な意味合いで、今日こういう場で、こういう形でお手伝いをさせて頂いているという事を改めて私自身も喜んでおります。そんな気持ちで進めさせて頂きますので、よろしくお願い致します。

それでは、予定より自己紹介の時間が少し長くなりましたが、ある意味で皆さん方の活動をより深く理解した上で、これからの意見交換に繋がっていくのではと思います。

これからの会議の進め方ですけれども、簡単に御説明をさせて頂きたいと思えます。

今日は、現在、策定作業が進められております新たな北海道総合開発計画、今、中間整理という段階のものが出ております。それについて事務局の方から簡単にこの後御説明を頂きたいと思えます。それについて、今日御出席の各メンバーの皆様方から、この中間整理についての御意見、ここはどうなのだろうかとか、あるいは、私自身はこう思うけれども、ここはやっぱりこういう方向でというようなところ、忌憚のないところをそれぞれ皆さん方から御意見を頂きたいと思えます。その後、更に今後に向けての御意見というのを、時間の少し許される範囲の中で意見交換という形で進めて行きたいと思えますが、その辺はまた時間の関係を見ながらお願いをしたいと思っておりますので、大まかな流れとしてはそのような形でこれから進めて行きたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

#### 4. 国土交通省北海道局説明

○小磯氏 それでは、中間整理についての説明、事務局の方からお願いを致します。

○鎌田参事官 それでは、私の方から、15分ちょっとぐらいお時間を頂いて、中間整理の概要を説明させていただきます。計画部会の先生方でまとめて頂いた中間整理というのは、資料2-2という厚い物が本当のと言いますか、中間整理になっておりまして、これは文章と箇条書きの物になっております。これを説明すると、ちょっと15分ではなかなか難しいですし、今日は概要を説明した上で御意見を頂くという事ですので、使う資料は資料2-1、A4の横長になっておりますけれども、こちらの方で概要を説明させていただきます。

まず、1ページめくって頂きますと、これまでの流れのような進捗状況とスケジュールというのが書いております。新たな北海道総合開発計画は、本来であれば10年計画なので、平成29年までであったのですが、全国計画はオリンピックの関係もあって早く見直しをされたという事もあると、北海道の計画も昨年の秋に急遽前倒しをするという事になりまして、今年の1月30日に国土審議会北海道開発分科会を開催致しまして、ここで小磯先生、西山先生に入っている計画部会を設置するという事が決まっております。それ以降、2月から7月まで6カ月間で5回、計画部会を開いて頂いて、先ほどの中間整理まで来たという事です。

少し右の方を見て頂きたいのですが、今日のこのパートナーシップ会議、北海道価値創造パートナーシップ会議と呼んでいますけれども、これは元々といいますか、国土交通省の太田大臣に昨年の秋、相談した時に、作る過程からぜひ北海道の各地域で頑張っている皆さん方に意見を聞きながら作っていく事が必要だねという指示も頂きまして、今年の3月にスタート、その後、春4回やっております、今、秋の部という事で、先週函館、今日が釧路ですね、あと旭川、帯広という事で、ここを入れて3回やらせて頂く事を予定しております。

この後、また左側に戻りますが、下から3段目、計画部会を2回開催して、計画素案というのを作るという事で、今、来年の春の閣議決定を目指しているところです。

2ページ目ですけれども、中間整理のポイントという事で少し説明を致します。

北海道の現状は、冒頭の局長の挨拶にもありましたけれども、強みという面では、左側の農水産物の生産量で全国1位というものが沢山あります。ホタテ、バレイショ、生乳という事も書いております。

それから、その下の段になりますが、食の輸出、あるいは外国人観光客という海外関係、こちらも北海道、輸出で見ても本州はこの間1.5倍ぐらいなのですが、北海道は2.5倍に伸びている。先ほどの挨拶にもありましたけれども、その中でもホタテが約半分位を占めているという事で、これまでではどうか、主に冷凍物、貝柱とかそういうものが主であったと思いますけれども、最近では、ここにありますが、衛生管理、あるいは輸送技

術、交通ネットワークの整備、そういった事もあって、生食での輸出が段々増えてきているという事でございます。

その右側は外国人観光客ですが、これは最近よくニュースになっていますけれども、全国で昨年1,300万人という事になりましたが、その中でも1割以上の方が北海道にも来ていると。この伸び率も、全国は同じ11年で3倍ぐらいなのですが、北海道は5倍に伸びているという事で、北海道を訪れる観光客の方が増えています。これまでは東アジア、台湾、中国、香港とかが中心でしたけれども、新しく航路が開かれた事もあって、最近タイ、マレーシアなどの東南アジアの方も段々増えてきているという事です。

ただ、一方、課題として、右側にありますが、人口減少と高齢化、これは昨年あたりからと言いますか、地方の消滅とかそういう衝撃的な言葉と一緒にクローズアップされた問題ですけれども、その中でも北海道は、全国よりも10年先に人口減少が始まっているというのが下のグラフです。同じく高齢化についても、以前は北海道の方が低かったのですが、最近ぐんと伸びて、全国に10年先駆けて高齢化も進んでいるという事で、こういう課題の面でも全国の先進地になっているという事です。

その下の広域分散型と言いますのは、今日、釧路ですけれども、札幌、釧路と言いますと、本州でいうと大体東京、名古屋とほとんど変わらないぐらいなのですが、その間にどれぐらいの都市があるかというのを想像して頂くと、これは本州の方向けに作っていますけれども、いかに北海道が広いか、都市間が離れているかというのがおわかり頂けるかと思えます。

では、これを受けて、下の段の一番左になりますけれども、どういう戦略で取り組むか。これまでも色々話が出ていますけれども、一つは食に関する事、もう一つは観光、これらを戦略的産業にして、今後もしばらく人口減少が続きますけれども、アジアを中心とした世界を相手にした戦略的な産業にしていく。その上でも、では、北海道の食料生産、あるいは海外の方が魅力的に感じる観光のスポットというのは、下にある通り生産空間、いわゆる農村だったり、漁村だったり、知床もそうですけれども、人々が沢山住んでいるところというよりは、ものごとの生産等に携わっているところを生産空間という事で定義づけをして、そこを引き続き維持していく、支えていく事によって、世界の北海道を目指すというような戦略にしております。

右の方にいきますと、一番右に北海道版コンパクト+ネットワークと書いてありますけれども、後程もう少し詳しく説明しますが、北海道を20幾つぐらいの圏域に分けた時に、その一つの圏域の中に生産を主にやる空間と地方の市街部、それとそこの中心となる都市という3階層に分けて、それぞれの今持っている機能を維持あるいは強化していく事によって生産空間を引き続き支えていくという事が、北海道としては重要だというのが少し全国と違うところかなというふうに定義をしております。

そのためには、そのちょっと左、北海道の地図が書いてありますけれども、一つは、道路あるいは空港、港湾などの交通のネットワークを強化するという事と、農林水産業ある

いは観光業などを世界水準の魅力あるものにしていく、付加価値をつけていくという事が重要だという事しております。

1枚めくって頂きまして、3ページ目、これが中間整理の、先ほどの厚い資料と言いますか、資料2-2の目次の構成になっております。ここは赤字のところが入れているところという事ですので、ポイントとして見て頂ければと思います。

第2章に飛びますが、キャッチフレーズは「世界の北海道」、ビジョンとしては「世界水準の価値創造空間」を形成します。そのために三つの目標を立てているという事です。

第3章の計画推進の基本方針の中では、まず、人口が、(2)のところにありますけれども、先ほど申し上げました「生産空間」「市街地」「中心都市」という3層構造、この基礎圏域を形成しているというのが北海道の特徴ですから、特に生産空間を維持していくためにどういう事をやっていくかというのが重要でと。それから、札幌都市圏については、引き続き北海道全体を引っ張っていくという役割が必要だ。それともう一つは、人口減少時代だからこそ、ここに集まって頂いた皆さんがそうなるのですが、人こそが資源だ、北海道には農水産物のような資源もありますけれども、人こそが資源だという事を明確に位置づけて、そこを更に力強くやっていくという事が次の10年では重要ですという事が書いてございます。

具体的にどういう事かというのは、次のページの4ページ目、一番上に中間整理に掲載している取組のイメージというところで御説明をさせて頂こうと思います。

左の上が、人が輝く地域社会の形成という事で、このイメージ図がオホーツクと網走あたりをイメージにしたポンチ絵になっているのですけれども、生産空間というふうに書いているところは、農地だったり漁村だったりというふうに取って頂ければと思うのですけれども、そこがまさに食料を生産したり、観光の面でも非常に自然景観あるいは人工的な景観の優れた地域という事になろうかと思えます。

ここを維持していくためには、先ほどから言われています色々な創意工夫が必要ですが、青いところが数千人規模の地方にある市街地をイメージして頂くと良いのですが、そこでは日頃の生活機能あるいは都市機能を既に維持していつている、生産空間の方が買い物に行ったり役場に行ったりというようなイメージです。それから赤いところは、ここでいうと多分網走という事になると思うのですが、釧路でいえば、釧路だったり中標津だったり根室だったりという事になろうかと思うのですけれども、そういったところでは、医療の面でもさらに高度な医療、あるいは大学があるとか、あるいは文化的な施設、それと福祉の面でも少し規模の大きなものが揃っているようなイメージです。この三つの圏域がそれぞれの持っている機能を、人は減っていく部分はあるかと思えますけれども、維持し、強化する事によって、右に小さく書いてありますが、人がそこに留まるようなダム機能と言っていますけれども、あとポンプ機能というのは、人を呼び戻す、一旦出ていった方が戻ってくる、あるいは本州から北海道へ移ってくるとか、そういった事が可能になるのではないかという事です。

下の段は、北海道の価値創造力の強化という事で、人づくりに重点を置きましょうという事です。左側は、まさにこの会議がそうなのですけれども、このパートナーシップ会議も、作っていく段階はもちろんですけれども、計画を来年の春作って、それを進める上でも、引き続き今日こういうふうに行っているような会議を全道展開していく、テーマも各地域によって違うと思いますが、各地域地域のテーマに合ったようなパートナーシップ活動を展開していこうと、このように考えております。

それから、この右に、これは北海道の計画ですので、この釧路、根室地域には北方領土隣接地域がございます。そこの振興についても、当然引き続き地域振興計画の強化を図るというような事も書いてございます。

右側にいきますと、世界に目を向けた産業の振興という事で、農林水産業・食関連産業を振興させる事によって、一つは、こちらの釧路、根室もそうですけれども、最近、農業は大規模化に向かっています。そのためには、人が減っていく中では、規模を拡大して効率化を図るという事と、左の絵にあります、無人トラクターによる農業とか、スマート農業と言っていますけれども、こういったイノベーションを活かしたような事で、高齢化だったり就業者が減っていく事に対応していくという事。

それから、その下の食の総合拠点作りというのは、一部の町で成功事例もありますが、北海道の場合、どうしても原料を本州に、非常に良質な農産品を本州に持って行って、それが加工されて北海道に戻ってくるという事を、付加価値がなかなか付かないという事が昔から言われておりますけれども、生産地にその食品加工工場を誘致する事によって、地元の雇用も見出せるような、そういう仕組み作りをしていこう、このように考えております。

それから、右側の世界水準の観光地の形成ですけれども、最近、この東北海道の部分も観光庁から指定された広域観光圏になっておりますけれども、ただ、まだまだ外国人のお客さんが増えているという事もあります。一方では、観光の平準化が求められる部分があります。一つは、シーズンによる、北海道はどうしても夏だったり真冬、雪、スノーリゾートがありますので、夏と冬は多いのですが、それ以外のシーズンには減ってしまう。あるいは、宿泊客で見るとどうしても道央圏に集中していて、この道東だったり、あるいは道北では宿泊するお客さんが余り多くないといった事があります。そのあたりの平準化を図るための色々な試みを続けていきたいというふう考えております。

それから、その下、地域の強みを活かしたというのは、北の優位性という事で、北極海航路とか、そういったものに活路を見出すような事も考えていこうという事です。

それから、最後の項目になりますが、強靱で持続可能な国土の形成という事で、左側は、一つは北海道の豊かな自然環境をきちんと保全していくという事、それから北海道が持つメリットの一つに再生可能エネルギー、バイオマスだったり、あと風力、太陽光もそうですが、そういう賦存量が全国に比べて非常に可能性があると言われております。ただ、北海道の場合、本州に送電できるものには限りがありますので、その発電時に余力の



ある部分については、それを、この絵ですと、例えばそれを水素という形に変えて、地域の中でエネルギー循環を目指すというような試みを今年から始めておりました、北海道水素地域づくりプラットフォームというのを立ち上げて、下にあるような団体に加盟して頂いて、地産地消のエネルギーを目指すという試みを既に始めております。

それから、右側の安全・安心の部分ですけれども、今年の冬は本当に道東、特に根室が厳しかったと思うのですが、爆弾低気圧がやってきて、暴風雪プラス高潮とか、そういう複合災害も起こっております。こういう最近の災害に対応するような取組を道や市町村と一緒に考えていきたいという事、それから、道庁もはっきり仰っていますが、今、首都直下とか南海トラフの地震がかなりの確率で起きると言われていますので、そのバックアップ機能を北海道が持つという事を期待されているところでございます。

それから、5ページ目、6ページ目は、今日やっているような北海道価値創造パートナーシップ会議を始め、色々な人づくりのプラットフォームを来年以降も全道で展開していきますという事が書いてあります。計画は一応2016年度から2025年度までの10年間ですので、今ここで終わりという事ではなく来年以降も引き続きやっていきますし、中間点検のような事もやっていきたいと、そういう事を書かせて頂いております。

すみません、ちょっと時間をオーバーしましたが、説明は以上でございます。

○小磯氏 ありがとうございます。

ただいま中間整理について御説明頂きました。各メンバーの皆さんには、事前に資料の方をお送りしていたかと思えますけれども、改めて担当者からの御説明をお聞きになられて、これについての御意見という事で、これから頂戴したいと思えます。

順番は先ほどとは逆に、森崎さんの方からお願い出来ればと思えます。よろしく願います。

○森崎氏 今、鎌田参事官のお話の中でも、何度も人づくりというお話が出て参りました。私も先ほど自己紹介の時に、人づくりがすごく重要だという事を感じているというお話をさせて頂きましたが、そこでの視点で少しお話をさせて頂ければと思えます。

私がこの27年度にこういったシンポジウムですとか、会議ですとかにお声かけを頂く事がすごく急に多くなりました。それはどうしてなのかなというふうに考えたのですけれども、昔でいう有識者会議ですとか、そういったところの、大変言葉が悪くて恐縮なのですが、机上のお話よりも、もっともっと地元というか、いわゆる一般の人間の声を拾ってくれるという空気が段々出て来ているのかなというふうに感じているところです。それと、こういった国の方で作成した資料も、私の目から見るととても堅くて、なかなか内容を、これはもう図式化されているので見やすいかなと思うのですが、文章を見てもどこからどういうふうに読み解いて良いかというのがなかなか正直難しいところです。そこを小さな団体の代表がこのような会議に参加させて頂いて、かみ砕いて伝えるという役どころを担わされているのではないかなというふうに感じているところです。

それで、私は普段女性の支援という言い方は余り使いたくないのですが、女性と係わり

ながら、雇用ですとか、仕事づくりについて色々考えている活動をしているのですけれども、国が女性の活躍云々というお話を声高にしている中で、普段一人一人の女性達と個別カウンセリングをしている中で、なかなかそことはかけ離れているなど感じて毎日相談をしております。

私たちの活動は、先ほど、もっと大きく格好よくありたいというふうにお話をさせて頂きましたけれども、一人一人が生きるという事、自分のこの世に生を受けたという事に責任を持ってというのでしょうかね、自己責任において自己肯定感を高めながら、一人一人が生きていくという事がすごく大事なかなと思っております。

そのためには、自分自身がどうやって生きるかという事をまず考える機会がすごく必要かと思います。先ほどポンプ機能と仰いましたでしょうか、人がもしも出ていっても戻ってくるというようなお話があったかと思うのですが、子供達は、ぜひこの地域から一度出てほしいと思っております。首都圏なり世界なり、グローバルな視点を身につけて、ぜひまたこの地域に戻って来たい、そういうふうにも思ってもらえるような地域づくりがすごく大切かなと思ってます。このまま残っていて、井の中の蛙ではなくて、まず世界を見て来てほしい。アジアの人達が北海道によく足を運ぶようになったというお話もありましたけれども、タイの方では、北海道が大きなブランドになっているというお話も聞いた事があります。若者たちには、そういう事を自分の目で確かめてきて頂きたいです。そして、これが、俺たちの故郷でどういうふうに活かせるのかというのを本当に自分の事として感じてほしいかなと思っております。

女性が元気になったら家庭が元気になります。家庭が元気になったら夫も子供も元気になります。子供が元気になったら地域が元気になります。地域が元気になるとそこにまた戻って来たくになります。一回外に出た子供たちは、自分の子供を育てる時に、自分の子供を自分が育ったこの故郷でぜひ育ててほしいなと思うようになります。私たち、大人と呼ばれている世代は、それを担っているのだと思います。

女性の視点で地域づくりを考えた時にできる事は、私たちができる事は小さな物を作った事です。これが大きな事に繋がるのではないかなというのを本当に実感しています。個数にして、これですね、25,000個ほど売り上げているのですけれども、これも私達の方だけだったらとてもできる事ではなくて、釧路市役所さん始め、地元の報道の方ですとかラジオ局さんですとか、皆さん協力して頂いて、地域で地域の物として地方に声を高く評判にして頂いているところです。

こういった地元で根差したというか、今私達ができる事をやっていく事がすごく大事で、子供達は、お父さん、お母さんが仕事しに行っている、それを見ています。内職は子供達の遊んでいるところでできるのですね。「お母さん、何作っているの」「これって、釧路のお土産になるんだよ」「これ作っているんだよ」、子供たちが学校で「うちのお母さんね、釧路のお土産作っているんだ」、そういうふうにも自慢したくなります。そんな小さな活動が必要なのではないかなと思っております。

これが魚網タオルだけではなくて、一人一人、農業に関する事、漁業に関する事、工業に関する事、それがこの地域と行政と民間とが本当の意味で一つになって、何かプロジェクトなり、何か小さな活動なりができるような、そんな仕組みが出来たらなと思っております。そんなところでよろしかったでしょうか。

○小磯氏 ありがとうございます。先ほど魚網タオルも見せてもらいましたけれども、この取り組みの意味を計画の施策にどう結びつけていくのか、少し考えていって頂ければというふうに思います。

さて、次に同じ女性メンバーで金子さんよろしくお願ひします。

○金子氏 私の方では、まず、こちらの間整理なのですけれども、大変興味深く読ませて頂きました。その中で、まず人口が大変減ってくるという事に非常に危機感を覚えるなという事がございます。

釧路市にしてもそうなのですけれども、これから10年、20年経つてくると、釧路市の人口も10万人ちょっとになってしまうのではないかという様な試算もございますし、これからの北海道がどうなっていくのか、また、私どもの道東がどうなっていくのかという事を考えると、非常に不安があるなというふうにちょっと怯えを感じるぐらいです。

その中で、人口減少にどの様に対応して行ったら良いのかというふうに考える時に、やっぱり私も森崎さんと同じ女性という事で考えてしまうのが、どうしても子育て、そして妊娠するまでの周囲の支えというものが、今それが北海道で手厚いかどうかという事が問題視されるのではないかというふうに感じています。

今、例えば不妊治療をするというような女性について、社会がバックアップしているかという事を考えると、冷やかしかがあるというような事も聞きますし、なかなかそういったものがきちんと温かい目で見られていない現状があると思うのですけれども、そういった事、妊娠するまでのサポート、また産んでからのサポートというものをもう少し手厚くする必要というのがあるのではないかというふうに感じています。

そして、それもそうなのですけれども、新しく生まれてくる命についても、どれだけ周囲が喜んであげられるか、そういった事というのも大事なのかなというふうに最近感じているところです。

私どもが建築士会という団体を通して行っています活動の中に、色々な団体と結びついて事業を行うというものもあるのですけれども、昨年の全道大会の時に女性委員会の方で、「君の椅子」というプロジェクトをなさっている磯田さんという方をお呼びして、プロジェクトの中身をお聞きする事がありました。その中で、生まれてくる子供達に町が椅子をプレゼントする、ここに生まれてくれてありがとうと、君の居場所はここにあるという事を伝えていくという事を地域ぐるみで行っていくというプロジェクトをお聞きしています。また、愛別町の取組なんかで、これは有志でやっているらしいのですけれども、子供が生まれると花火を上げるというのですね。生まれたよというのが町全体にみんなが、今、赤ちゃんが生まれたんだというか、お昼に上げるといいましたかね、みんな学校の子

供達が拍手するそうです。そういった取組なんかを聞いていると、一つ一つの命を大事にするという取組というのをどれだけ地域が支えていけるかという事が、やはり故郷をきちんと子供たちに意識として学ばせる、自分たちの命を大事にするという取組というのが出てくるのではないかと思うのです。そういった事によって、自分を支えてくれる、愛されているという自覚が生まれるという事によって、どこか出て行っても、この町に帰って来ようという事に結びついてこないかなど。命を大事にするという事が必要ではないかなというふうに強く感じられたところです。

また、読ませて頂いている中に、イノベーションの事になるのですが、例えば林業の話になりますけれども、色々と書いてございますが、林業とか農業もそうなのですが、農業も機械化するとか無人化するとか、そういった事は非常に担い手不足のところにとっては良いかもしれませんが、要は、働く人にとっては雇用が失われていかなのかという様な心配をついついしてしまうというのが私の場合はございます。また、林業の時に、成長の早い木を植えてコストダウンしましょうみたいな事もありますけれども、今まで林業が成長の早い針葉樹を大幅に植えてきた事によって、やはり山の体系というのが変わってしまったという事もあって、広葉樹が大変入手しづらくなって、北海道の広葉樹が少なくなってしまったというのをクラフト作家の方などからはよくよく耳に致します。自分の町の木を使って家具なり、何なり作れなくなるというのは非常に寂しい事でもございますし、地域の産業を支えるという面から考えましても、こういった事ももう少し御考慮頂けると有り難いなというふうに感じております。

そして、建築士会の方の取組の中で、ただいま行っているもので、北海道さんからの委託でやらせて頂いているのですが、家庭科の授業の中で、教育の出前というか、出張講座をさせて頂いているのですが、そうしますと色々な高校に出向いて講座をさせて頂く事になりますが、その中でちょっと気づかされる事があったのでお話しさせて頂きたいと思えます。

あからさまに弱者とわかる方って多分いらっしゃると思うのですが、そういった方々については、皆さん手厚い保護があったりですとか、何かしらの支援はあるのですが、そうではなくて、例えば経済的に困窮しているというふうに外部からは余り見えないのだけでも、学校に通うのもやっただよとか、もしくは自己肯定が全くできない中で高校生活を始めて、なかなか自分自身が本当にこの場所でこうして勉強していて良いのだろうかというのが判らない、今まで生まれて来て一度も自信を持てた事がないというような子供達が勉強しているという様な所に出くわす事もあります。先生方は一生懸命に少しでも成功体験を与えてあげたいという事で、私達の取組について説明しに来て下さいと、少しでも楽しい思いをさせてやりたいのですという事でお呼び頂く事もあります。そうした子供達が社会に出て、何か夢を持てる事というのは非常に大事な事だと思うのですが、そういった時に、やはり単純作業に近いような雇用でも生み出す事ができなければ、そういった子供達は一体どこで生産活動を行うのだろうかという様な事が非常に心配に

なります。そうした子供達にも夢を持てる社会という事が北海道にはあっても良いのではないかというふうに考えますので、そういった今までちょっと目を向けられる事の少なかつた子供達についても御支援を頂ける様な事があればというふうに考えております。

ちょっと長くなってしまいますが、後は防災の事について少し申し上げたいのですけれども、防災意識がやはり、北海道の中でも釧路はもちろん津波に遭うという事もございますので、比較的高い場所ではあると思っておりますが、内陸に行くと非常に低いというか、旭川方面、札幌方面になると希薄だよというふうにお聞きしております。これから先に内水被害とかそういったものとかも色々出てくる可能性もございますので、防災意識の向上というものにつきましては、やはり防災教育に小さい頃から力を入れる事が必要なかなというふうに思いまして、こちらの方を何か盛り込んで頂けると有り難いというふうに思って、申し述べさせていただきます。

以上でございます。

○小磯氏 ありがとうございます。

それでは次に、大野さんお願いします。

○大野氏 女性のお二人からは人の部分でお話がありましたので、私は産業的な部分でお話を少ししたいなというふうに思います。

世界に向けた産業の振興という様な項目もありますけれども、具体的に何処に向けて何を発信していくのか、何処に向けて何を売っていくのかというところを、やっぱりもう少し明確にすべきなのだろうなというふうには思っております。

例えば、世界に目を向けてといっても、それが北米なのか、それとも東南アジアなのかによっては、趣向も違いますし、売る物も違いますし、もちろん流通も変わって来ます。今の段階で言うと、恐らく東南アジアの方を見ていくのがこれからの伸びを考えても正しいのだろうと思えますし、今現在の観光を考えたにしても、そちら側の方の流入が多いといったところで、しっかりと目を向けるのだったら、そこに絞った様なやり方というのはやっていくべきなのかなというふうに思います。

一方で、例えば、そういった様な東南アジアは、これから伸びるといっては世界的に見てもそういう風潮でありますし、よって、競争も多くなるといったところであります。今度は競争相手と比べた時に、我々の優位性がどこにあるのか。同じく九州も東南アジアを見ていて、九州から出る物と北海道から出る物と、それがどのような競争をしていて、どういった様な趣向のものを生み出して売っていくのか、それをしっかりとマーケティングしていかないと、恐らく枠組みだけを作ったところで商品が売れないというような、基本的な商売の原理のところ崩れていくのかなというふうに思います。もちろん行政としての枠組みをやっていくという事は重要なかもしれませんが、我々産業側としても、北海道の優位性をどう考えて、この優位性があるもの、競争力があるものを必要としている地域は何処なのだという様な視点からもやはり一つ考えなければいけないのかなというふうに思います。

我々青年会議所の方の取組でやっているのは、この釧路で、例えば水産物、海産物に非常に優位性がありますよというお話なのですが、果たして、我々がその海産物に優位性があるあると言っていますけれども、本当に優位性があるのかというふうに考えた時に、我々が港で受け入れている物は、やっぱり前浜でとれる物だけではない訳であります。要は、立地の関係であったり、漁場の関係であったりという事でここに降ろされているというだけの話でありますから、これが、状況が変わってくるとその優位性は崩れてくる訳であります。それが本当にこの地域の優位性として、産業としてずっとやっていくべきなのかという事も考えられますし、北海道は非常に自然環境が豊かで、これは世界に誇れるものだよというお話をしますけれども、では、もっと世界に目を向けた時に、グランドキャニオンの広大さを知っていますか、オーストラリアとかの非常に大きな草原とか見た事がありますかという事を考えると、北海道の雄大さと言いますけれども、雄大さは世界から見たらどれ位の雄大さですかという事だと思えます。

何が言いたいかという、やはり北海道の良さというものをどこに絞ってやっていくのか、そして、その優位性がある物を何処に売っていくのかという対象を明確にしないと、結局大味のままどこにも伝わらないで終わってしまうのかなと。

よく北海道の人達の地域性というか、民族性というので良く言われるのは、表現が下手だと、発信が下手だという事はやっぱり良く言われております。今どんどんグローバル化していておりますし、ここに書いてあります農業に関しても大規模化を図っていくという事ではあるのですが、逆に世界の風潮としては、グローバル化が進んでいって大規模でやっているところか、もしくは完全にそこでしか作れないようなものか、どっちかにシフトしていかなければならないのかなと。結局、コモディティ化するような商品だと、例えば農産畜産物に関しては、オーストラリアであったりとか、北米であったりとかという様な、あれぐらいの規模感の農業と我々が大規模と言っているところの規模というのはどの位の差があるのかという事です、それを小規模でやっていきますよといったところは、皆シフトはしていくのだろうと思えますけれども、これは私たちの町で作って、地域住民が一生懸命作っていますよという商品がどこの地域でも同じような商品を作る訳です。そこに商品としての優位性というのはどこに有るのですかといった時に、いや、皆で頑張っている、地域で作っている物ですからという事で買ってもらえるかどうかという事です。本当にその地域で採れる物で、そこに優位性がある物を明確にわからないと、やはりこれからはグローバル化の社会の中でなかなか発信力もなくなっていきますし、そういったところでは売れるポイントを絞っていかないと、どんなに整備をしたところで、そこは絵に描いた餅で終わってしまうのかなというふうに思います。

そういう事を考えると、色々な施策をやる上で、しっかりと産業のポイントもそうですし、対象を明確にするという事をやはりもう少し、ブラッシュアップはまだまだできるのかなというふうには思っております。

以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。この点については、この後、少し時間があれば議論を深めていければと思います。

それでは次に、伊関さんお願い致します。

○伊関氏 中間整理、余り時間がなかったのですが、少し読み込ませて頂きました。多岐に亘って良く纏められているのだなというふうには思ったのですが、どうしてもイメージ先行で、イメージをどう具現化していくか、具体化していくかというのが、もう少し突っ込んで良いのかなというふうに全体的に思いました。

先ほど、人こそが資源というのがどこかに出ていましたが、これがあちこちに出てくるのです。第3章で、多様な人材が活発な交流・コミュニケーションを経験する事で醸成、また、創造性の高い人材は、多様性を受容する都市・地域に集まる傾向にあると、こういう書き方をされているわけですね。その後、第4章で、北海道学の教育を通じて、子供から大人まで地域に関する理解と愛着を深めると、こういう話になって、施策の方向性という形で取りまとめられております。誰がどのようにその北海道学というのを進めていくんだというのが、ちょっとまだ書き切れていないのかなというふうに思います。

先ほど女性のお二人からも出ていましたように、一回外へ出て、外から釧路を見て、この地域を見て、それぞれの地域を見て、戻ってこいと。でも、実際には文章になっている様に、どうしても多様性を受容する都市・地域に集まる傾向にある。そうすると、ますます北海道でいうと札幌圏に集中してしまうという事があるのではないかというふうに思います。やっぱり札幌圏集中にならないような北海道学という教え方を、各地域に根差せるような北海道学にしてほしいなというのが要望であります。

それから、総体的には、この広い北海道の中で、どうしても何か読んでいくと札幌圏中心の取りまとめになりがちというか、なっている様な気がするのですね。これはやっぱりゾーンとして見るべきだと思うのですね。北海道の中心は今、現状、札幌ですけれども、それはそれとして、やっぱり道北、道央、道東、道南、せめてこの四つのブロックの中で、ブロックがそれぞれどう発展していくのかという辺りを施策として作っていかねばならないのではないかなというふうに思っています。

対流を活発化させて、人々の地方部への還流を一層促進すると、書くと格好良い、読んでも格好良いのですけれども、生産圏、魅力ある農林水産業を育成するという事で、実際に働いている人間が日本の食料を支えているよという誇りを持てる様な、もちろんインカムというか、収入もそれなりに確保する事が大事ですけれども、さっき言った4ブロックの中で、若者が一、二時間でそのブロックの中の中核都市へ行き来できるような、文化面も含めて、そういう交通インフラというの必要なのではないかなと。

それから、高齢者が特に都市サービスを受けられるような優しい対応というのが、ソフト面も含めて必要なのではないかなと。ともすると、高齢者は危ないから車の免許を返上して下さいという風潮が今ありますが、自分で運転するしかないという高齢者の方もいらっしゃるわけですね。その辺をやはりきちっとした政策を打ってやらなければ、優しい

交通という事にはならないのではないかなというふうに思っております。

この地域、鉄道、バス等、いわゆる公共交通手段が、プアですから、釧路の医療機関へ通うのに、朝出て夜中に帰るとか、あるいは、釧路市に一泊して医療を受けなければならないという地域事情があります。こういう事をブロック別にきちんと把握して、解決していくという事が必要なのではないかなというふうに思っております。

道路がどうしても札幌から外へ外へ延びて建設されて来たという事実がありまして、そうすると、道路が出来たところは、例えば札幌から岩見沢まで出来たとすると、その地域の文化も含めて、ストロー効果で札幌へ引っ張られてしまうと思うのですね。もっと地方を中核、何回もしつこいようですが、ブロックに分けて、そのブロックの中心から道路を作っていくと、それぞれのブロックでまた違った動きが出るのではないかなというふうに考えております。

最後にもう一つ、北方領土隣接地域の安定振興という話がありまして、水産業の低迷など地域経済は依然として厳しい状況にありますとありますが、北方領土に隣接ですから根室圏という事だと思っておりますが、そこだけで考えるのではなくて、釧路圏とゾーンで考えて、特に釧路、根室間の道路整備、あるいはJRの時間の見直し等で、根室だけで考えないで、北方領土というのはやっぱり東北海道全体で捉えていくべきではないかなというふうに思っております。そうしなければ、北方領土が返還されたという時に、根室は疲弊してしまっているという事になりかねないなど。先ほど説明会の場所、こういう場が根室にないのをさっきメモしたので、根室の方に代わって、老婆心ながら一言申し上げました。

以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。今、伊関さんのお話を聞いていて、この釧路という地所らしい意見、札幌から見た目とは違う視点で、北海道は広いですからそれぞれの地域の見方がありますが、そこから見た目で、この計画の中間整理について率直な印象で語られたのではないかなと感じました。ありがとうございました。

それでは石橋さん、次をお願い致します。

○石橋氏 私のお話ししたい事は全部出たような気がするのですが、一口で言えば、人こそが資源というのは、これはまさにその通りなのですね。人口減少社会になるという前提で物事の組み立てが行われている訳であります。

実は先日の道議会でも、道の人口ビジョンを出されていますから、北海道は北海道としても、人口減に対する対応をどうしようというのは最大の課題だというふうに捉えているのはその通りだろうと思うのですね。では、その時に、人口減に対して何をするのかとといった時に、これは今回の北海道総合開発計画の中で取り組むべきものは何かというと、今日標茶高校の校長先生もおいででございますけれども、やはり教育するという問題と、それから、先ほどちょっと金子さんから出されました、言ってみれば子育てしやすい環境を作るという事ですね。さっき愛別の話がありましたが、まさにその通りだろうと思うのですよ。



私どもの町は、農業、酪農という産業の町なのですが、実は2割が新規就農なのです。私は平成の開拓者と言っているのですが、ほとんどが本州からの移住者なのです。この人たちの子供の数は、平均2.4人なのです。これは先ほど数字がありましたけれども、北海道の1.38人に比べても約1人多いのです。という事は、彼らにとっては、浜中に来て農業をやる事は子育てのしやすい環境だということも一面言えるのです。全てがそうだとは言いませんけれども、子供がたくさんいても、3人、4人いても、子供を育てられるよという、そういう環境が浜中にはあるという、そういう形で彼らは来ていると思うのです。だとすると、そういうところを北海道は、先ほど大野さんからアピールが下手だという話がありましたが、もっともつきちんと、我が町は、我がエリアは、我が地域はという、そういう形でアピールしていく事、そして、本当にこうやって地球がものすごく大きな変動をしています。言ってみれば、とんでもない暑さがあつたり、とんでもない雨があつたり、あるいは火山活動が活発になったりした、要するに自然の災害リスクも大きくなって来ている訳ですね。その時に北海道というこの島が、住みよい島であるかどうかというのは、言ってみれば、日本全国から北海道を目指してくる方々の一つの対象地域として考えてもらえるのではないかなと思うのです。その時に子育てしやすい場所、安全性の高い場所、必ずしも北海道が、安全性が高いとは言いませんけれども、そういう場所としてアピールできるものがあればしっかりアピールしていく。そのための整備を、これは北海道総合開発計画の中でしっかりと書き込んでいくという事が大事な事ではないかなと私は思うのです。

例えば、ここに、これからの北海道の戦略は食と観光だというふうに言われております。食というのは、農水という農業と漁業という事になるのでしょうかけれども、食の生産の問題も、先ほど出ていますけれども、やっぱり気候変動リスクに対してどう対応していくかという問題を、これからの北海道総合開発計画の中では盛り込むべき課題としてあると私は思うのです。

気候に対して人間は無力です。何も出来ないのは、これは当たり前の事なのですが、しかし、それを克服できるだけの知恵も持っていると思はるのです。それらをしっかりとこの計画の中に書き込んでいって頂く。それは治水であり、あるいは、先ほど、出来た物を運ぶという点での交通インフラの整備という問題、それによってコストの低減にもつなげていくという問題、そういう事をしっかりと書き込んでいく事が必要であると思はるし、それは同時に、北海道に来られる観光客、いわゆる東南アジアの観光客の皆さんにとっても安全性の確保という点では、極めて重要な問題だろうというふうに思っているのです。

私はいつも色々な観光事業の時に言っているのですが、ニュージーランドに行くのだったら、この北海道、道東に来なさいよ。アウトドアライフで出来ないのは、実は海水浴だけなのです。あとは全部できるのがこの釧路、根室なのです。そういう地域で、しかも日本語ぺらぺらに通じますよ、という地域として私はこの道東を売り込んでいるので

すね。しかも、四季折々に楽しむべき事がいっぱいあるというところなのですね。バードウォッチングに世界からこの釧路、根室地域にいっぱい来られるのですね。ですから、彼らにしてみれば、こんなに身近なところにこんな鳥が見られる場所、世界中にそうないよというのは現実問題ですね。それは町村ごとのアピールではなくて、広域、エリアとしてきちんとアピールするという、そういう取り組み方。ですから、観光に対する提言の中でも、この計画の中には、先ほど伊関さんからも仰いましたけれども、エリアとしてアピールすると。そのエリアを活用するための交通インフラはどうあるべきなのかという書き方も必要だろうと私は思っていますね。

色々な意味で、北海道が食と観光という事をこれからの戦略の一番のポイントにしようという時には、では、それをしっかりやるための担い手確保、教育の問題、それから、本州からの呼び込みという問題も含めてやっていかなければならないと思います。

最後に申し上げたい事は、農業にしても、漁業にしても、その担い手をしっかりと教育する施設が何もないというのが実は残念な事なのですね。農業高校や農業系の大学では、知識は教えます。知識は教えますけれども、知恵は絶対に教えられません。知恵を教えるというのはどういう事か。経営者としての能力をしっかりと鍛えるという事なのです。

ですから、今、北海道には、そういう事をやれる所というのは、北海道農業大学校という、実は都道府県ごとに1校しかないのですね。それが本別にあります。これもおかしな話なのです。さっきのエリアにあります通り、北海道というのは東北6県プラス新潟県よりも広い所なのですね。ですから、東北と新潟を合わせた7県には7つの農業大学校があるのです。ところが、残念ながら、北海道は1つしかないのですね。それはおかしいですよ。

ですから、私は最近、ここ二、三年ずっと言っているのですが、農業経営者を育てる教育をする場所をもっとたくさん作れと。これは色々な意味で、道立の農業高校もいっぱいありますから、その中に1学科設けたって良いのですね。あるいは水産高校の中に、そういう魚をとる技術の問題よりは、漁業経営としてどういう事をやらなければならないかという知恵を教えるという、そういう人材育成が必要なのですね。

ですから、北海道がこれからも食料基地として生きていくためには、そういう経営者、基幹になる農水という産業の経営者を育てるという教育機関を是非いっぱい作って頂いて、俺、北海道へ行って漁業をやろうかな、農業をやろうかなと、全国から若い人たちを呼び込めれば最高だなというふうに思いますね。

これは開発局の仕事ではないと思います、建設部の仕事ではないと思いますけれども、少なくとも今の文科省のカリキュラムにありませんし、農水省に言っても、農水省は、いや、そんな事は無理という話しかしないのですね。

実は、北大の小林先生が、北大では農業の知識は教えられるけれども、農業者を育てる事は大学では出来ませんと、こう仰っているのですね。それが最大の問題点だと私は思っていますから、あとは、それをしっかり実行できるだけの、言ってみればリスク対応でき

る国土計画として、この北海道総合開発計画を作られれば良いなというふうに私は思っています。

以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。

それでは、生田さんお願いします。

○生田氏 私のような者がこういう席に出て良かったのかなと思います。大変勉強になって、私、3年目になりますけれども、この3年間標茶で色々取り組んできた事が、まさにここにバックボーンがあったなという思いで皆さんのお話も聞かせて頂きましたし、中間整理の概要についてもそういうふうに捉えております。

ちょっと余談ぽくなって申し訳ないのですが、今、地方の高校が直面している問題は全て同じで、人口流出、中学生の人口の減少によって高校がどんどん小さくなっていくと。そして、小さくなって1間口になれば、いずれ廃校、募集停止という、これはどこの地域も同じ問題を抱えております。本校も実はそういう流れの中であって、特色を出せないからそういうふうに人が来ないのだとお叱りを受けながら、何とか中学生をたくさん募集したいなという事で特色を出してきたつもりですが、打ち上げ花火ではいけない訳で、その中で、本校が地元の特色を活かしつつ、あるいは道東の全体の、もっと言えば北海道全体の特色を活かしながら、やっぱり北海道にはこういう学校がなければだめだねと言ってもらえるためにはどうしたら良いのかという事で、少しじたばた致しました。それで、まず、自然環境を勉強できる、あるいは食べ物、これの安心・安全というものは何なのかという、そういう事をしっかり学べる学校であるという事を出し、最後に付け加えたのが、人と人をつなぐ力を持っているかどうかと、こういう事を揃えて、命を巡る三つの系列という事で特色を出させて頂きました。

それで、私、農業ではなくて国語が専門なのですが、最初は農業高校に来て、本当に素晴らしい取組で、生徒の感性だとか、これからの生きる力、それから消費者として賢く生きていく、そういう生徒を育てるには全く申し分のない、全ての学校でこういうカリキュラムがあれば良いなと思うぐらいだったので、よくよく聞いてみると離農者が多くて、人がどんどん流出している、それから、農地が改修出来なくて困っている、それからもっと言えば、こんなに素晴らしい北海道なのに、北海道産のガイドがない、ガイドはほとんど道外から来るという様な問題に色々直面しました。それで私たちとしては、やっぱり人づくりというのがすごく大事だという事を感じておりました。

それで、この中間整理にもありますけれども、どのようにして人を育てていくかという事に色々考えさせられまして、一つは地域と世界をつなぐ力という事で、英語を勉強させましようという事に今ようやく芽が出て来ました。それから、食べ物もただ加工するという技術ではなくて、安心・安全な食べ物を作るという事から、自分が農業に携わらなくても、何か購買する時に、自分が消費者として買う時に、北海道の物ってやっぱりおいしいから、多少高くても良いよねとか、北海道の物って顔が見える食べ物だから、少しぐらい

高くてもやっぱり安心なんだよとか、そういう事が理解出来る生徒を育てたいと。それからもう一つは、そのためには豊かな自然を守らなければならないという自然の価値観を解っている生徒、そして、その大切さを人に伝える事の出来る生徒を育てたいという事を特色として進めて参りました。

その結果、それが本当に正しいのかなと、良かったのかなと思って見ましたら、この中間整理にほとんど全部書いていて、さすがお国のやる事というのは、何歩先もやっているのだなというふうに思いましたけれども。

一つ、ここで私、言葉を覚えましたけれども、地方都市の市街地だとか生産空間という所のあり方、これは、私たちの学校のあり方と本当に一致していると思います。どこの地域も、おらが町の小中学校、高校を残してくれというような訴えがありまして、私もそうは思っているのですけれども、それをやりますと全ての高校が潰れてしまいます。そうではなくて、例えば国土交通省、開発局さんが考えている圏域ごとに、その圏域を特色づけるような学校を残していくという事を、例えば道教委とともに考えていくとかという事をしないと、やはりどの地域も地元から高校が無くなる、小学校が無くなるというのは困るわけで、みんな無くさないでくれという方向にいくのですけれども、でも、そんな事をしていると、いずれ共倒れです。全部の高校が無くなって、本当に大きな市、都市部にしか高校が無くなってしまおうという現状があります。やはりその地域を活かす人づくりをしている学校、あるいは、それができる学校を残していくと。そういうような事を総合的に考えた方が良いのかなという事を今思っておりました。

それから、もう一つは、高校は、例えば、今この場合は国土交通省さん主催のお話になりますけれども、色々な取組があって、例えば六次産業を私は生徒に少し教えて、六次産業のあり方だとか、別に担い手になれという訳ではないのですけれども、自分が将来サービス業に就くにしても、製造業に就くにしても、一次産業に就くにしても、全体の流れの中で自分はどこにいるのかという事を理解して欲しいという事で、六次産業化の授業を取り入れたのですけれども、そうすると、私が今取り入れたのは内閣府が主催している食プロなのですけれども、そうすると農水省さんでも別な取組があったりとか、色々な省庁さんで違う取組がばらばらあったり、北海道は北海道でまた違う取組があって、結局、方針が色々な所から発していると。僕が見つけたものはその中の一つではあるのですけれども、こんな様に色々なものが色々な所で複線的に走っているのですけれども、一番最後のところの、例えば高校のような所は、どれを活用すれば良いのかと迷ってしまう事もあるのですね。なので、どういう取組がどこの、例えば高校でどういう取組があるのかという事ももう少しコラボレーションしながら進めて頂くと、効率良く出来るのかなという事を思ったりしていました。

いずれにしても、私、農業高校の先生には、この10年間頑張ってくださいと。今、本当に農業は向かい風かもしれないけれども、この10年で色々な事が多分変わるとは私と思っています。農業女子の進出、それから都市を目指さない若者、つまり田舎が良

いと、地元が良いというふうにして都市を敬遠する若者が増えて来ているというふうに聞いております。それから、本校のように自然の特色、北海道の自然はこんなに素晴らしいのだという教育に取り組んでいる高校も増えておりますので、やはり一旦は外に出ても地元に戻って、地元の良さを人に伝えたいと、まちづくりに参画したいという生徒は多分確実に増えてくるし、それから例えば、別海や、あるいは鶴居村のように、外部から入ってくる人に手厚くもてなして、そして、外部の人たちの力を使ってまちづくりにまた拍車をかけていこうという文化的にも高いまちづくりに成功している地域もあるというふうに聞いております。そんなふうにも多分ライフスタイルも変わってくるというふうに思っております。そして、それは多分に女性の力だと思うのですが、そういう時代がきつくとくるというふうに私も思っております。だから、10年間、ちょっと農業技術だとか農業の温存を図って、そして、来るべきライフスタイルの変化なんかにもちゃんと対応できるような地域づくりをして行きたい。そして、高校も実はそういう事に十分に役割を果たしているという事をちょっとお話をさせて頂きたいと。

ちょっと長くなって申し訳ございませんでした。

○小磯氏 ありがとうございます。

皆様から中間整理についての御意見という事で、非常に幅広い御意見を頂きました。

ここで、計画部会に参加している我々からも、皆さん方の御意見をお聞きした上でのコメントという形で申し上げます。それでは、最初に西山先生の方からお願いしたいと思えます。

○西山氏 皆さん、地に根をおろした活動をしておられる方だからこその非常に迫力のある、また、説得力、重みのある御意見をたくさん伺いまして、本当によく理解できました。

一方で、国交省さんが作られる国の政策としての、国の法律に基づく北海道総合開発計画というものについて、これは何が出来る計画で、何が出来ない計画なのかという事を、私も実は今年からこの部会委員をしていることもあり、最初に色々と国交省の方とも話をさせて頂きました。北海道庁というのが当然あるし、自治体があるわけですね。その中でこの開発局というのは何なのか、国交省として国の北海道局が作る計画というものにはどういう意味があるのかという事です。特別な答を私がおもって、ここでそれを言うわけではないのですが、先ほど伊関さんが仰ったように、まず一つは理念的な事は書かれています。コンセプトや理念は書かれているのですが、それが地域に具体的に落ちていないという点が指摘できます。ただ、一方で、国が作る施策であって、道とか自治体で作るものに被せて、強制的に作るということもまた一方で出来ない。そうすると、どうしてもコンセプトと技術論ということになります。新しいコンセプトを提供し、それを具体化する技術を道具立てとして用意すること。そして、それを皆さん使いこなして頂きたいというような形にならざるを得ないのかなと感じています。策定に関わっている者として、難しさと、だけれども、それ故に出来る事があるのだろうというふうに考えました。

そういう中で、特に先ほど伊関さんが仰っていた、あるいは石橋さんも仰っていましたことについてです。伊関さんはゾーンという言葉、ゾーンごとでの考え方というところははっきりと謳われていないというか、見ようによっては札幌中心主義ではないのかというお話がありました。それから、石橋さんからもエリアごとの考え方というものがあるのだというようなお話があり、これらに対して、どういうふうにそれを議論すれば良いのか、この計画として、そういうものに対してもう少し強い具体的なメッセージが必要なのか、それが政策的に打てるのか、それらの課題について我々は、さらに検討をさせて頂きたいというふうに思いました。私自身の気付きと言いますか、中間整理ではクリア出来ていないところだろうなというふうに思った次第です。

それともう一つ、これも最後に生田校長先生から非常に重要な、私もほとんどそれと同じ事を言おうと準備していた事、要するにこの10年、この10年で何が起きるかというご指摘がありました。

私は専門が建築の都市計画なのですがすけれども、コンパクトシティという考え方は、80年代後半にはすでにアメリカで確立していた考え方で、90年代の初頭には日本に来たのに、10数年間眠っていたというか、最近になってまたむくむくと出てきた概念なのです。でも、このコンパクトシティというのは、実際にアメリカなどではもう20年以上の時間が経っていますから、実際にコンパクトシティ概念に基づいた都市の再編という事が起きていて、これは非常に恐ろしいものであるという事を、私は、実はこの部会でも説明しました。要するに、過当競争というか都市間競争、地域間競争でどこが生き残るかという事、逆に言えば滅びる町が出て来るということを前提にしているのです。こういう施策の展開においては、上から「ここを残して、ここを潰します」というような事は言えませんよね。どんなに口が裂けても北海道庁も言えないし、自治体でさえも自分の地域について言えません。だけれども、現実問題として、2040年の増田レポートのように明らかに、ああいう別の指標を使えば、ここはもう潰れますよという事をはっきり言えるわけです。

何が言いたいかというと、これからの10年間に何が起きるかというのは、全体がじり貧、どんどんどん過疎化とかが進んできて、そして、全体がポシャっていくというような事には本当はならないはずなのです。特にこのコンパクトシティという考え方は、結果としては自助努力で頑張る所を応援する制度なのです。逆に言うと、そのことにうまく気づかずに頑張れなかった所を見捨てる。要するに都市間競争、地域間競争を前提としているのがコンパクトシティの考え方であるというふうに言わざるを得ないのです。ですから、そういう意味では、10年間じっとただ低下していくのではなくて、個々で気づいた所がより頑張る。後手に回ったり、要領が悪かったところは、申し訳ないけれども、減んでいくこととなります。

ですから、今の時点は全体が低下している状況ですけれども、もしかしたら、核となる、この言葉で言えば、圏域中心都市や地方部の市街地と書いていますけれども、こう

いう所がもっと明確な形で生き残り、そういう所は逆に人口が増えていくかも知れません。周りが減んでいくという事は、そこが吸収していく事になります。それが一気に札幌に行ったり、一気に東京に行ったりするかどうかは、全体としての魅力が無ければそうなるかもしれませんが、これは分からないわけです。だから、まさに皆さんが仰っていたような、本当に人づくりが出来る、子供を育てる事が出来る、弱者に生きる力を与える、そういうふうな一つ一つの取組というものが、そこで住むべき町かどうかという事を選択させるわけです。そういう意味では、皆様の、そういう取組というものが、結局どこかの町や地域を生き残らせるために力となり、一方で、そこで起きる都市間競争というか、盛衰というものがこの10年間でかなりはっきりとしてくると言えます。

ですから、その高校や中学だけの話ではなく、まさに町そのものがそういうふうな吸収されたり、合併というか、今のような、平成の大合併みたいな、ああいう制度的な合併ではなくて、空間的な合併ですね、合併というか統合、吸収というか、こういう事が物理的にはもう起こるしかないという事なのです。もしそうでないとすれば、移民をたくさん受け入れたり、海外の労働者を受け入れたりするというような全く別の選択肢もあるかもしれません。ですが、私はその10年間というのをどう過ごすか、誰もが自分の町のために頑張るのだけれども、申し訳ないけれども、今のままの日本の全体の政策である限りは、どこかが勝って、どこかが負ける。アメリカというのは完全に勝ち負けで都市が減んでいく。何十万の都市であっても減ぶのです。ここでは細かい事まで話せませんが、そういうシステムを日本の国交省はコンパクトシティというような名前を使いながら取り入れて、やはり全体としての生き残りを図るという事を言っているわけです。そういう意味では、話を最初に戻すと、ゾーンごととかエリアごとでの具体的な計画を、この計画の中で作るという事は、現実的には僕は難しいと思うのです。ただ、もう一步踏み込んだ、やはりリアリティのあるというか、地域の実情に合った計画にもう少し深化させていかなければ行けないのだろうという事を感じた次第です。

私は、一方で観光が専門なので、それについてもちょっと申し上げたい事がありますが、また次の発言の機会にさせていただきます。

○小磯氏 ありがとうございます。

皆さん方から本当に活発な御意見を頂きましたので、少し予定の時間を上回る形になっていますが、私もやっぱり計画部会のメンバーという事で、しかも、皆さん方と一緒に釧路地域で活動していたお仲間という立場もあるので、少しお話をさせて頂きたいと思えます。

順番に行きますと、最初に森崎さんの方からお話を頂きまして、人づくりということ。森崎さんの話の中で、やっぱり若者はまず外に出て、そういう若者が戻ってくれるような地域づくりということ。やっぱりこれからの時代、特に人口減少の問題というのは、ただ単に出生率が低下して人が減るというよりも、地方にとって大きな問題は、若者が大都市に出て行って戻って来ないという、この状況を、いかにこれからはきちっとした地域の戦

略として呼び戻していくかという、そこが大事な部分だというふうに思います。

その中で私自身、今、地方への回帰といいますか、私が指導している学生でも、意外に地方に志向する若者が今増えてきています。この動きをどう受けとめていくのかというのは、これからの北海道の政策、戦略としても非常に大事な部分ではないかなと思います。だから、これまでの交流の政策というのは、どんどん来てほしいとか、一方向での政策メッセージが多かったのですが、実は大事なのは双方向で、こちらも出かけていくと向こうの良さがわかり、それがきっかけになって向こうからも来てくれるという双方向の視点が必要です。西山先生のご専門のインバウンド、観光の今の動きなんかを見ていると、やっぱり本当のインバウンド大国というのは外に出かけていく事も好きな国民が多いのです。それによって、要は外からくる人を引きつける、そういう仕掛け、戦略も実は蓄えられていくのです。そんなことを感じながら意見を聞いておりました。

それから金子さんの御意見の中で、人口減少へのすごい危機感の中から、命を大切にすることがやっぱり取組として大事なのではないかという発言がありましたが、これはある意味で、いわゆる子育て環境の整備とかという言葉では言い尽くせない深い意味があるのではないかなと感じました。弱者への配慮の話をされていましたが、そういう地域づくり、この地域はしっかりと子供たち、ここで生まれ育った人たちを大切にしているなという、そういうメッセージが伝わるような政策って何なのだろうかというところを改めて考えさせられました。そういう議論をこれから進めていく必要があるのではないかなと思いました。

それから、大野さんが言う産業戦略という視点には私も同感します。北海道、ここでいけば道東、その強み、良さというのは、どこに絞り込んで戦略を展開していくのか、それが中間整理のメッセージからなかなか伝わってこないということでしょう。私も大野さんとお付き合いが長いですが、企業経営者としては、若いにもかかわらず、すごく実践的な取組をやっておられる、要は売れるポイントを絞っていくということを実践してきた立場からの意見で、これを政策として、特に地域の政策としてどう展開していくのか、私はすごく大事な部分だというふうに思います。

国際戦略については、確かに今インバウンド、アジア地域から、多くの国から観光で北海道にも来ますが、私は、実はこれは計画部会でも発言させて頂いて、以前の議論でも強く申し上げているのですけれども、北海道の最大の優位性というのは、北に位置しているということです。今、地球の北半球に実はまだまだ経済発展を担う国々が、これはアジアも、ヨーロッパも、アメリカも位置している、そういう所がお互いに交流し合う、特に交通という面でいくと、これまでは北極を中心とする空間が旧共産圏という事で使えなかったのが今使えるようになり、なおかつ地球温暖化という事で、海も航路として使えるようになった。そうなってくると、北の国々との接点、地勢的にこの北海道が非常に優位な状況にあるということ。これをどういう形で北海道の政策、戦略として展開していくかというのは、私、今回の計画の大きなポイントだというふうに思うのです。その中で、こ



の道東地域、特に釧路というのは、一番アメリカに近い、そういう日本の位置にある。今、釧路港はバルク港湾を目指していますが、そういう戦略というのは、実はこの計画の中で改めて日本全体のアジアとの交流に加えて、北に位置している北海道がそういう条件をどう活かしていくのかという戦略に位置づけられるべきでしょう。実は北海道の総合開発計画というのは、北方圏交流という、東京発ではない、地域発の国際交流のコンセプトというのは、第3期の北海道総合開発計画で、これは閣議決定した計画の中で位置づけて展開してきたという伝統があるわけで、良い伝統というのはやっぱり活かしていく、継続していく事も大事なので、そんな思いで改めて大野さんの話を聞いておりました。

伊関さんは、先ほど申し上げましたけれども、やはり釧路から見た計画ということ。特に札幌から見た北海道、そのイメージに対して、北海道にはそれぞれの広い地域がある。その地域から見た北海道としての新しい総合開発計画は何なのか。確かに個別に細かく地域ごとの政策をここで述べるわけにはいかないと思います。ただ、その地域の特性に応じて、それぞれの方向性で考えていくという、そのための政策のメッセージというのは総合開発計画の中にもあっても良いのではないかなと。過去の計画でも6圏域という、道央、道南、道北、道東についてはオホーツク、釧路・根室、十勝と分けた、そういう圏域でこれまで総合計画を展開されてきたという伝統もあります。その伝統をどう今後の計画でつないでいくのかというご指摘で、これも大事なところだと思います。

それからもう一つ、伊関さんの発言の中で、北方領土の、根室地域の話がありまして、これも私、計画部会の中で発言を何回か発言させて頂きました。私もやっぱり釧路で長く活動していて、北方領土というものに隣接した根室、釧路地域、この地域の役割、これはある意味で国の政策として領土問題にどう向き合っていくのか重要な役割がある。実は、北方領土隣接地域振興対策というのは国の政策です。30年前に立てられた。あの当時は、200海里問題という漁業環境の大変厳しい中で、これは地域問題ではなくて国の政策として展開していくべきという、そこで作られた政策が今、根室をめぐる漁業環境の厳しき、これを改めて見ると、国としてこの北方領土問題、外交上の色々な環境変化の中で、改めてそれを支える地域としてどういう政策を展開していくのかという議論、改めて北海道の計画の中でも必要ではないかなという事で私も意見を申し上げたという経緯があります。大変大事な論点だと思います。

石橋さんは、私もお付き合いが長いのですが、浜中での色々な取組みの中ですごいと思うのは、さっきもお話がありましたけれども、新規の就農者の方たちの出生率が2.4人という、実はここに大きな鍵があって、浜中というのは外の人に対して大変温かい優しい町なのです。そういうまちづくりというのは、これからの北海道にとっても非常に大事な部分で、それが結果的にいうと、ある意味で人口減少という問題、そういうテーマに向き合っていく北海道の大切な方向ではないかなと感じています。

それから、最後に生田校長先生の方からお話を頂きまして、私は標茶高校も以前、10何年前から環境教育という、湿原地域を抱えているというところで、私もたまたま一緒に

活動しておりました。水質の環境を守るという、そういう取組に環境クラブという標茶高校の生徒さんが一緒に参加して頂きまして、そういう活動をされていた学生さんが結局、環境政策を学ぼうという事で、それをテーマに進学先を決め、今その分野で社会人として頑張っておられるという経験があります。若い頃から地域の問題にしっかり自分たちで向き合っ、そのために実践的に活動するという事が最大の地域教育であって、そういう地域教育というようなものが、実は今日の皆さん方のお話の中にあつた大きなテーマである担い手づくり、やっぱり担い手というものに繋がっていくのではないかなという事を改めて感じました。

一方で、今日は私、こちらの北海道局の皆さん方と同じ席に座っておりまして、実はそういう声を全部組み込んだ計画を作ればもちろん良いのですけれども、北海道の総合開発計画というのは国の計画で、しかも閣議決定という、しかも国土交通省の北海道局の立場で、関係省庁と調整をしながら作り上げていくという大変難しい仕事です。そういう中では、出来れば、どこまで踏み込んで、他省庁の了解を得て計画作りに結びついて行けるかというのは、実はこういうパートナーシップという地域の皆さん方の声としてこういうものがあつたというのも、多分大きな説得力ある材料の一つになるのではないかなと思っております。こちら側におられる北海道局の皆さんに対しては、今日の声をぜひ良い意味で有効に使って、良い形の計画にして頂きたいなということを最後に申し上げたいと思いません。

という事で、一応、中間整理についての御意見、それを踏まえたコメントという事で話をさせて頂きました。

## 5. 意見交換

○小磯氏 時間の関係で、あともう一巡、皆さん方から、ちょっと時間は限られるのですけれども、今回の中間整理に対する個別の意見という事だけではなくて、これからの北海道総合開発計画という、その計画に象徴される北海道政策に対する期待について、北海道そのものが今後どういう方向で行けば良いのかということ、これだけはというようなところがありましたら、皆さんの方から御発言を頂ければというふうに思います。

それでは順番、さっき森崎さんから行きました。今度は生田さんの方からお願いしたいと思います。

○生田氏 実は、私、教員としての振り出し、30年前に振り出しが阿寒だったものから、道東スタートでございました。その時も、飲み屋を探しに釧路に何回も足を運んだのですけれども、もう既にその時からシャッター街が始まっています、何て寂しい町だと。私、札幌から来たものですから、何と面白みのない地域だという事で、何か心を閉ざした形で教員生活を過ごしたような気が致しますが、人の温かさに気がついたのは五、六年後という事で、その時にまた転勤してしまったわけですが、30年ぶりに戻って参りまして、また釧路の方に出かけて行くと、実に人の姿が本当に良く見える町だと。若

い人達がネットワークを作り、そしてまちづくりに参画し、自ら企画して運営していくという素晴らしい町に変貌して、当時からあったのかもしれませんが、私が見えなかっただけかもしれませんが、そこで私は大変触発されまして、やっぱり人は人と繋がっていかねばならないと。そして、地域というのは、人の繋がりの中で生まれ変わっていくのだろうという事を勉強させて頂きました。とても魅力のある道東の地域だというふうにも思っております。

そして、今、この中間整理の方で見させて頂きましたものの中には、例えば、私はそういう意味で末端機関です、最終機関ですけれども、そういうところで何が具体的に出来るのかという事を実際にやらせて頂いていると。出来ればそういう事で、例えば学校なんかは今何をやっているのだろうと、そして、この中間整理なんかにある様な北海道の計画の中で、学校は具体的に何をしているのだろうかという事を良く吸い上げて頂けると、そんな事をしているのだったら、これも任せてみようかなとか、これやってみないかいとか、そういう事に巻き込んで頂けると大変有難いなというふうに思っております。

人づくりというところでは、本当に道東というのは素晴らしいと思いますし、それから、先ほど言いましたけれども、人が戻ってくる事のできるまちづくりと。標茶町というのは、決して悪口ではないのですけれども、色々な意味で資源を温存していて、なかなかまだ表に出していないという町だと思っておりますから、そういう意味で刺さり易いというか、ちょっとやってみようやという事が可能な、本当にお宝がたくさん埋まっている町だと思うので、生徒をいずれ戻して、そして自分たちの力で立ち上げて行きたいという、そういう生徒を作りたいので、時々釧路まで連れて来て、そういうまちづくりをしている若い人達と生徒と一緒にお話をさせたりもしています。そういう様なところを、何か本当に小さな取組なのですけれども、そういうところを大きな組織がちょっと見て頂いて取り上げて頂けると、ひょっとしたら、もう少し大きな部分の隙間を埋める様な、そういう様な取組になって見えてくるのかなと思いますので、ひとつよろしく願い致します。

ありがとうございました。

○小磯氏 ありがとうございます。

それでは石橋さん、お願い致します。

○石橋氏 私からは1点だけ申し上げておきたいと思いますが、先ほど伊関さんから話がありましたのですが、どうも根室は置き去りにされていくのかなという感じがするのですが、それはまず、次の10年、新計画の重点的取組として一番最初に出てくるのが、生産空間を支えるための重層的な機能分担と交通ネットワークの強化とあるのですね。実は、この交通ネットワークの強化という点でいうと、国土交通省さんは道路だけが我々の領分で、いわゆるJRは俺の領分ではないと思っている節があるのですが、私は、これは違うと思うのです。この広い北海道という島を、きちんと交通ネットワークを重層的に整備していかなければ、人も物も動かないのですよ。そのためには、私はJRの経営までやれとは言いませんけれども、少なくとも九州や四国や、あるいは東海に比べたら、北海道

というこの島の気候的条件からすると、物凄くハンデを背負っているのですよ、JRは。そういう点からすると、道路網の整備をする事は、これはもちろんという事になりますけれども、JRの路床については、少なくとも国土交通省の所管事項としてやって頂く、これが必要だろうと思うのです。

例えば、釧路から根室に今の「おおぞら」を走らせようと思ったら、あの路盤では走らせられないのですね、現実問題として。それから貨物列車も走れないのですよ。それぐらい脆弱なのです。それは、将来の北方領土が返ってくる返ってこないは別問題として、根室というエリアをきちっと北方領土に向かう町として考えた時には、あのJRの線路の路床をきちっと整備するというのは大事な事だと私は思うのです。それは国土交通省の仕事だと私は思っていますから、ぜひ、交通ネットワークの強化という点からすると、道路だけではなく、北海道のJRの路床については、国土交通省の所管事項としてしっかりと整備する、それをぜひやって頂きたいというふうに思っています。それをこの計画に書き込んで頂ければ、私の言うところは何も無いです。

○小磯氏 ありがとうございます。大変強い要望という事で御意見を頂きました。

では、次、伊関さんお願いします。

○伊関氏 JRの話、言われてしまいました。釧路港、国際バルク戦略港湾という事で、今、建設が盛んに進められております。港湾だけ整備されてもどうしようもないので、このヒンターランドの生産圏と繋ぐ、JRも含めて交通ネットワークというのが網の目の様に張り巡らせてこそ、国際バルク戦略港湾も生きて来るのだというふうに思っております。

道路も長いですし、なかなか整備が出来ませんが、食料安保という観点から、交通網の整備というのは考えて頂きたい。これは日本の食料を守っているのだという事で、北海道だけではないよと、本州も含めた日本全体の問題だという事で、ぜひお願いしたいなというふうに思っています。

地域の特性を活かした産業の誘致だとか創生だとかというのは、今朝の新聞ですかね、厚岸でウイスキーの蒸留所が云々というのも出ています。色々な芽が出てくると思うのです。この釧路港、今、東北海道、オホーツク、十勝、釧根の中で五つの重要港湾がありますけれども、国内、国外の定期航路が走っているのはこの釧路港しかありません。これを上手く皆で使っていくという事が食料基地を確立していく事になるのではないかなというふうに思っております。

世界へ向けて今、週2便のコンテナ船も走っておりますので、それを地域皆で活かしていこうという事が求められていると思いますので、ぜひ、港だけではなくて、港と繋がるネットワークというのをきちんと書き込んで頂ければというふうに思います。

○小磯氏 ありがとうございます。

それでは大野さん、お願いします。

○大野氏 ありがとうございます。今、伊関さんの方から、皆でなんていう話もありまし

たけれども、我々小規模の事業者からすると、実際に北海道のポテンシャルはこれだけあって、世界の人々が必要としてくれているのだよという様な事を説明されても、実際に自分達がどうやって世界に売っていけば良いのかといったところの具体案が、なかなか小規模な事業者というのは分からないところが多いです。もちろんそういった事を踏まえた上で、市も道も国も、そういったプランはたくさん用意していらっしゃいますし、でも、小規模の事業者の一つのポイントは何なのかといったら、基本的に情報弱者が多いのです。ですから、行政としては、こういったプランをたくさん用意しましたといったところで終わってしまっているというのが非常に残念に感じる事が多いです。ある程度意欲の高い人間というのは、自らそういった情報を取りにいて、知って、そういった所を使おうというふうに思うのですけれども、やはりもっともっと、特に北海道の生産をやっている方々の気質というのは、どちらかと言ったらのんびりというか、悪く言うと商売気質がちょっと弱いというか、でも、良いものはやっぱり作っているのです。でも、売り方を知らなかったりとか、届け方を知らないという事が多いです。そして、それを知る機会、知る仕組みがあっても、それをまた知るというような意欲に欠けるという訳ではないのですけれども、ちょっと機会が少ないというところであります。

ですから、こういったような場所に呼んで頂いて、こういった計画を私としても、国として北海道をこうしていくのだと、指針を示して頂くという事に関して理解を深める機会を頂いたという事は、非常に勉強になりますし、光栄な事であります。ぜひ、そういった意味も踏まえまして、地域の小さな事業者のところの意見もぜひ取り入れて頂ければ良いのかなというふうに思っております。

その上で、国の方向性としての部分に関しては、流通の部分に関しましても、我々、小口で輸出出来る事がないので、千歳空港などで民間さんが集積しながら一つのコンテナで送るような取組をされているという事もありますけれども、ぜひ、そういった我々小規模の事業者でも世界で勝負ができるような窓口であったりですとか、流通の仕組みであったりですとか、そういったものをもう少し我々小規模の事業者が使いやすいような仕組みづくりをやって頂けると、我々としてはそういった勝負をして行こうという気持ちにもなるのかなというふうには思います。

それと同時に、一つ一つの地域ごとによって実情も違いますし、北海道は国交省さんもありますし、振興局があって、行政単位が少し複雑になっているので、特に国交省さんとしての指針といったところの具体性をどんどん掘り下げていけばいく程地方行政と重なってくる部分もあるというのは良くわかるのですけれども、これからグローバル化をどんどんどんどんしていくよといったところに関して言えば、やっぱりアバウトなところの戦略のままでいってしまうと、それこそどこにポイントがあるのといったところで、グローバルな社会の中では全然相手にされないのではないのかなと。ですから、もっともっと露骨に北海道としての良さといったところを、行政区分と関係なく、もっとそこを掘り下げて何処に何を売っていくのかといった事はやはりもっと考えるべきなのかなと。ただ単に食

と観光という事だけにいってしまっても、やはり対象として何処に何を売って、どこをポイントとしてやっていくのかという事が見えないと、やっていく施策の中身もやっぱり変わっていくのではないのかなというふうに僕は思っております。

ですので、なかなかこういう政策に関して反映出来るところというのは、国の部分、地方行政の部分という垣根は難しいかもしれませんが、ぜひ、そういった意味も踏まえまして、国として出来る事といったところをもう少し掘り込んでやって頂ければ良いのかなというふうに思いました。

以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。

それでは金子さん、お願いします。

○金子氏 私の方で申し上げたいのは、やっぱり最後は人なのだなというところかなというふうに思います。釧路港おもてなし倶楽部で活動させて頂いている中で、生田先生の学校にも実はお手伝い頂いて、外国人の方がいらした時におもてなしをするのですけれども、高校生の皆様方が英語を勉強して、その力を発揮しながら色々な案内をして下さったり、お茶を運んでくれたりと、色々やって下さっています。

そういった交流が生まれる中で、外国人の方に一番喜ばれるのが、心のこもったおもてなしというものを受けたという事が本当に嬉しかったと。色々見てきて観光した事よりも、こうして皆が力を合わせて、自分たちの出来る事で、切り紙とか折り紙をさせてもらったり、着物の着つけ体験をさせてもらったりというふうな事の方がよほど印象に残りましたという事で、そのためだけにもう一度日本に来たという方もいらっしゃるぐらいです。

そういった中で、人との交流というものが生み出すものというのは、非常に大きいなという事も一つあるのですけれども、その他に、ちょっと協働という事でいつも考える事がございますけれども、市民活動をしている時に、自分たちの力だけでは足りないという事で、特に開発建設部さんには大変お世話になっていて、市民活動の時に人手が足りない、助けてという事でお願いしますと、本当に快く良いですよというふうに協力して下さいます。そういった中で、市民のやっている事にお力添えをして下さる力強い方という形で頼りにさせて頂いているところもあるのですけれども、そういった中で顔の見える関係、行政と市民との顔の見える関係というのがあるという事は、本当は非常に良い事なのではないかというふうに思います。

地方自治体もそうだと思うのですが、何か顔を合わせると文句を言われるのではないかというふうに怯えてしまうという話もよく聞きますけれども、そういった事が何かいつも手伝ってくれていた人達だよなという時に、それが発生しますかという事もあると思います。そうした中で協働という事が非常に、これから国も色々変化があると思いますけれども、そういった中でも運営していく中で本当は重要な事なのかなというふうに思います。

また、今回、この中間整理の中に書かれている協働について、ボランティアとかそういった事についても、タダではなくて、きちんと仕事になるような出し方という事も検討していくという事が書かれている事に、私は非常に期待感を持っているという事も申し上げておきたいと思います。

色々と、例えばワークショップとかを住民の所に行ってやらせて頂くよという事になりましても、自分達が仕事を他に持っている中で出かけて行ってやるとなると、仕事を休んで行かなければならないという事も出てきます。そういった時に、やはりそれを続けていくと疲弊してしまう、下手すると会社を潰してしまうという事になりますので、そういった事のバックアップがあるというのは非常に大きな力にもなると思います。

人を育てていくという事に重点を置いて下さるこの総合計画でございますので、こちらの方で人材育成といった面で大きく期待をさせて頂きたいと思っております。

○小磯氏 ありがとうございます。大きな期待を込めた御発言で。

それでは、最後に森崎さん、お願い致します。

○森崎氏 ありがとうございます。

最後ですので、大きく二つの切り口でお話をさせて頂こうと思います。

一つは、私自身が嘱託職員ではありますが、行政職員の端くれと致しまして、文書の大切さをすごく理解しているという部分がございます。ただ、先ほども申し上げた通り、この分厚い資料が出てくると、一般の人達にとってはかみ砕く事はなかなか難しいという事で、それをかみ砕いて伝える役割を担っているのかなと思っているところなのですが、まず、住民一人一人が地域運営に関わる事というのが非常に大切だというふうに思っております。

その中で、ちょっと今日の会とはかけ離れた考え方なのかもしれないのですが、例えば、自治体の町内会の加入率がすごく少なくなっているとかというような問題提起もございますけれども、それはやはり、なかなか最近では必要性が少なくなったからなのかなというふうな思いもございます。地域と繋がるよりも、例えば車社会ですので、あちこちに行きやすくなったりとか、今インターネットの環境があって、インターネット上で自分の好みの人たちと繋がれる、そういうコミュニティーが作れるというような環境もあるからというものもあるのかなと思います。だから、現在は実際の交流というのが非常に大切になって来ているのかなと思います。

好きな仲間でコミュニティーを作ると、同様の考え方をする人が多いので、苦言を言う人も少なくなります。ただ、町内会にいと、昔はうるさいおじさんですとか、お喋りなおばちゃんですとか、そういった中でいろいろな社会教育を受けながら子供たちは育って来ていたのかなと思います。それがなかなか希薄になっている現在、そこに二つ目として、こちらのパートナーシップ活動の方には言葉としては出て来なかったかなと思うのですが、本日も、高校の先生もいらっしゃいますし、大学の先生もいらっしゃいますし、今、学生と言われる人たちに、大人の私達も必要なのかもしれないのですが、

キャリア教育という形で、何らかの形で一般の社会人も関わり合いながら、小さな頃からのキャリア教育というのは必要になってくるのかなと思っております。

普段ハローワークに居るものですから、ハローワークの数字を一つ。7月末の釧路管内の有効求人倍率というのは、1.04という数字が出ております。1.04というのは、100人仕事を探していたら104件の仕事があるという数字になっておりますが、もの五、六年前には0.224とか23とか、そんな数字でございました。100人仕事を探していても23件しか仕事がないという時代もございました。ただ、相談員として私が座っていて、感覚としては、全く変わった感覚がございません。求職者と呼ばせて頂いていますが、来所数は少なくなったかと思うのですが、一人一人と関わっていると、困った感というのに全く違った部分を感じられないというのが感覚でございます。その五、六年前も今も、企業さんはいわゆる人材不足というものを抱えているような思いがあります。昔も今も、人材不足というと単純に数字の部分がありますけれども、いわゆるここでほしい人材というのがいないのだという声をよく聞く事があります。ここで地域が担うのは、やはりキャリア教育であり、人づくりであるのではないかなと思っておりました。

本日の会議に参加させて頂いた事に大変感謝しております。ありがとうございます。

○小磯氏 ありがとうございます。いろいろ地域の実情というもの、実践的な立場から教えて頂いたという思いがします。

西山先生、どうでしょうか、皆さん方の御意見を改めてお聞きになられて、コメント頂ければと思いますが。

○西山氏 先ほどはコンパクトシティでちょっとシビアな話をしてしまいましたが、先ほどの話の結論としては、ともかく頑張る地域が生き残る、その地域は皆と一緒に落ちていく訳ではなくて、場合によっては、色々な意味で、空間的、物理的な要因でむしろ人口が増えていたりする可能性もある。要するに、人という事でいうと、発展する事もあり得る訳です。

ただ、全体としては、非常にシビアな事を繰り返すというか、発生した後にそういう形になっていくという事を国は政策としてとっているという事をポジティブに考えるしかないでしょう。やっぱり地域それぞれが、いかに自分達の地域をブランド化していくかというか、外から魅力が見えて、あそこに行ってみたい、あそこに行っておきたいとか、最終的には住みたいと思われる町になること、とはいえ、まずは訪れるとか、一度は行ってみたいといった事が大切になります。

私は、観光を一方で専門としており、私の所属する観光学高等研究センターは大学院を持っており、観光創造専攻と言います。そこでは、観光創造は価値創造であると言っています。要するに、最初からの有名観光地とか世界遺産はとりあえず放っておくとしても、やはり地域において新しい価値が創造されていくという事がどういう形で起こり得るかという事象に色々な側面から我々は関わっています。この計画の中でも大きく食と観光と謳われていますが、ただ、ここに書かれている観光という言葉を見ただけではどうして良い



かわからないところが正直あるのではないかなと思うのです。私は、そういう生き残りたいと言うとちょっと切実過ぎますけれども、もっと魅力的な町になって、人が生き生きするまちをつくりたいと思うのであれば、そのためには、まさに産業、特徴のある産業、それは漁業か農業か二次産業かわかりませんが、そういう産業を興して行って、そしてそれを外に発信していくという事になっていくと思うのです。その時に、観光には何が出来るかという事が重要です。

我々は今、DMO、デスティネーション・マネジメントという事を頻りに言っている訳です。これは、昔は良いものをつくったらお客さんは来てくれるのではないかと思っていたのですけれども、まさに大野さんが仰るように、ちゃんとした優位性というか、絞って、きちっとマーケティングするという様な事をやっていかないと、とてもではありませんが、人は来ないし、物は売れませんし、地域は活性化しない。そういう中で、デスティネーションとして自分達の地域を考える。デスティネーションというのは目的地です。だから、我々がどこかに行こうと思った時に、ハワイがデスティネーションである観光、パリかもしれないし、東京かもしれないし、京都かもしれない。そういう観光目的地、訪れる目的地としての自分たちの地域は外からどう見えているか、あるいは、外からどう見えるデスティネーションとなるように自分の地域をマネジメントしていくかというのがデスティネーション・マネジメントです。これがただのまちづくりとか観光まちづくりとか着地型観光などというのとちょっと違うのは、発想が逆なことです。視点が逆にあるという事、つまり自分たちの地域を客観的に見ようとする、客観的に見て取捨選択したり、磨きをかけたりして、それをきちっとマネジメントして、外に売り出していく、プロモーションしていくというような、この一連の活動が、従来はどうしてもそれは旅館組合がやる事でしょうか、観光協会がやる事でしょうか、商工会ではないですかとかという形で、地域みなで考えようとしなかったのです。裏を返すと民間の仕事だと、住民も行政もみな思っていたのです。観光事業者がやれば良い事であって、一般の我々は関係ない。我々は農業をやる、漁業をやる、物を作ると。そうではなくて、要するに、今、生き残りという事は死活問題であって、ある自治体にとっては、観光ほど公益性の高い事業はないわけです。要するに、それをやる事で生き残れるのであれば、観光に真剣に取り組むという事は、まさに民間の事業ではなくて公益事業な訳です。ただ、その公益性を担保するためには、それを担う組織が要る訳です。それは先ほどから出ている協働という言葉、協力して働くと書きますが、その官民協働という形で、要するに地域が全体として生き残っていくために地域をブランド化していく、そのために色々な産業を総動員してというか、先ほど大野さんが言われた様に絞り込んで、磨きをかけて、商品化して行って売り出していく、ブランド化して行って人に売り出していくというような、こういう事をやる組織が必要だと思うのです。今、金子さんとかが仰っているような、小さい活動だという様な言い方をされてはいますけれども、明らかにこれは公共サイドからの共感というか、理解を得て、その公益性というものを理解しているから、お手伝いというか、声をかけたら手助けして

くれるという関係が生まれているのです。これはまさに官民の協働が芽生えているという  
か、十分機能しつつあるという事です。これを更に目的を明確にして、デスティネーション・マネジメントをやるオーガニゼーション＝組織を作っていくことが求められます。こういう事に展開するような観光であること、ここで言う観光はそういう観光なのだという事まで、戦略的に、いわゆる技術論として書けると思うのです。それがまだ、計画には今書き込まれていないと私は思います。

ですから、今日のお話を聞いていて、中間整理段階で、この計画にはもっとそういうDMOとして地域が公益的な目的を掲げる組織を作り、観光という公益事業を官民が協働でやるのだというような、そこに今皆さんが仰っているような、地道なというより、確実に獲得しようとしている努力が結実される町が出来れば、そこが多分生き残っていく町になるというふうなシナリオを書くべきではないかと思いました。

そういう時に、石橋さんが先ほど農業経営者を育てなければいけないという話、要するに、これもまさに経営＝マネジメントができる人を育てるという事ですね。これは、私は六次産業化という事にも繋がると思うのですが、こういう優れた農業経営者、ビジョンを持っている農業経営者、あるいは漁業の経営者、それから、もしかしたら、別のまた食産業の経営者かもしれないけれども、そういうものを六次産業化していけるのは誰でしょう？やはり農業経営者が六次産業を興すのは難しく、むしろこれは三次産業をやっている人間がコーディネーターとなって六次産業化していくという事が必要ではないかと別の観光の専門家がいます。

ですから、そういう意味では、DMOというものをちょっと一度、皆さん頭の中に入れて考えて頂けないかという事、デスティネーション・マネジメント・オーガニゼーションですね。それを官民協働＝PPPですね、パブリックとプライベートのパートナーシップを結ぶ。今日もパートナーシップ会議ですけれども、パートナーシップを結んでDMOを運営していき、その公益性を公が認める事が出来たら、そこに一定程度の特区のような権限を与えていって、そのまちの成長というか、発展を支援する事が出来る。そして、その時の六次産業化、多分北海道においては六次産業化というのが最も大きなキーワードになってくると思いますが、そこにはやっぱりそういう農業をマネジメント出来る人がいる、漁業をマネジメント出来る人がいる、そういう人たちを束ねる、より六次産業のマネジャーみたいなものが必要になってくるという様な、そういうシナリオが明確に描ければ、そのノウハウを書く事が出来るのではないかなというふうに今日思いました。

○小磯氏 ありがとうございます。

私の方からも簡単に。皆さん方の話を聞いて2点、これは森崎さん、金子さん、それから大野さんのお話に共通するところですが、市民と行政との関係についてです。生田先生の話にも関わるのですが、大野さんの話の中に情報弱者という言葉がありました。これはやっぱり象徴的でして、こういう事をやりたい、こんな事をしたいのだけれどもという思いは地域の中にあっても、それにきちっと応えてくれる情報というのが実はなかなか無

い。これからの行政の役割というのは、予算を使って仕事をする事も大事なのですけれども、使える情報をタイミング良くしっかりと提供していくという役割が一層これからの政策マン、行政に求められて来ていると思います。その仕組み、関係づくりをどうしていくのかというのが大切で、そこで大事な事は顔の見える行政であり政策です。今回は計画、プランニングの策定ですからある意味で顔の見える計画という意識というのをやっぱり計画の策定作業の中に組み込む、まさにそこが本日のパートナーシップ会議の意義であり、地域の皆さんから見て、ああ、こういう計画なのだというような、そういう一定の親しみ、そこに政策としての親近感のある、それがやっぱり役に立つ計画に繋がるのではないかなという事をあらためて感じました。

それからもう1点、石橋さんの方からJR北海道の問題、大変生々しい問題なのですが、非常に大事な問題であって、交通の基盤というものをより安定的に地域が維持していくという事は、如何なる経済社会活動をやっていく上でも一番大事なことです、特に地方にとっては大事な基盤であり、鉄道問題に北海道がどう向き合うのか、すごく大事な問題だと思います。

実は、この北海道の総合開発計画というのは10年単位、10年先の北海道をどうするかという、そういう視野で議論ができる貴重な機会です。それは逆に言うと時間軸、長い時間軸で考え議論する機会であると、では過去に遡ってみればどうなのだろうかという事で、例えば根釧の歴史というのを考えてみますと、戦後の開拓の時代の鉄道は拓殖軌道です。まさに拓殖のため、北海道開拓のために鉄道事業というのが整備された時代で、財源は今で言えば開発予算です。今はもちろん制度が違いますけれども。逆に言うと、そういう歴史を改めて振り返る議論も、やっぱりこういう計画議論の中では実は大事で、より長期的な視野で少しこれまでの北海道を支えてきた仕組みとか、そういうものも改めて考えていく必要があるのではないかなと。これがやっぱり新しい総合計画という長期計画を、長い目で前も見、後ろも振り返りながら議論していく貴重な機会になるのではないかなという事を改めて感じました。もちろん受けとめていくべき大変難しいテーマではありますが、こういう場でこそ出てくる議論であり御意見なのかなという事を感じました。

## 6. 閉 会

○小磯氏 さて、一応与えられた時間がもう既にほぼ来ております。実は北海道局、今日幹部の皆さん、本当に貴重な時間、こういう形で御来席頂いて、全ての皆さん方の御意見にお答え頂くという時間はもちろんなかったのですけれども、どうでしょうか、局長の方から最後に御挨拶も含めて、少し感想という事でお話を頂ければと思いますが、よろしくをお願いします。

○岡部北海道局長 それでは、皆さんどうもありがとうございました。時間が限られた中で、司会の小磯先生にも色々御苦労頂きましたけれども、皆様から貴重な御意見をたくさん頂けたというふうに思っております。今後、計画作りの最終段階に向けて、皆様の御意

見をどう反映させていくかというのをこれから一生懸命考えたいというふうに思っておりますので、どうもありがとうございました。

若干、感想めいた話になりますが、一つは、圏域と言いますか、エリアの話が出ました。北海道は広いですし、それぞれの地域が皆さんそれぞれ特性を持っております。一方で、交通ネットワーク、今JRの話もありましたけれども、この釧路地域にも高速道路が延びてくるといような時代になってくると、従来の圏域の考え方が少しずつ変わってくるのかもしれませんが。あるいは、インバウンドの観光だとか、食、農林水産品の輸出なんていう事を考えて、グローバルな物の考え方をする時に、北海道の中の圏域をどう考えたら良いのだろうかというような課題もあるのではないかと考えておりました、計画にどのような方向性で、そこを書き込めるかというのは検討して参りたいというふうに思っております。貴重な御意見を頂きました。

それから、皆さんに共通して提示頂いた意見は、やっぱり人材の話だというふうに思っております。もちろん生田先生は、まさに子供たちの教育をして頂いているという事がありますが、我々国交省の余り得意な分野ではないという事でありまして、こういう計画を推進していく上では、まさに人材というのは極めて重要で、開発局も来ておりますけれども、道路を作る、港を作るという基盤を整備した上で、どういう人達にどういう経済活動をして頂くかという事を考えた時に、まさにグローバルだったり、あるいは地域の中の濃淡がつく時代になった時に、やっぱりそれぞれの地域に、地域の事を真剣に考えて、前向きに色々な事にチャレンジする人達に、どういうふうに活躍して頂くのかというのは非常に重要なところで、我々の立場からそこをどういうふうにサポート出来るのかという事が大きな課題だというふうに思っております。

一つは、こういうパートナーシップ会議という名前にしておりますけれども、冒頭に申し上げました計画作りの段階での御意見というのも反映して参りたいと思っておりますけれども、計画を作った後の推進に際して、やっぱりこういう地域で活躍されていた方々に今後も、こういう場が良いのか、どういう場が良いのか良くわかりませんが、参画頂いて、計画を推進していくところについて、地域地域の人材づくりの核を担って頂ければというふうに思っております、我々はそういう場を作るのがまずは使命だなというふうに思っております。

プラットフォームというような言い方もしますが、そういうものを道内のあちこちにたくさん作りながら、地域地域が目目の前の色々な課題、あるいは中長期的なビジョンを持って、この10年を乗り切っていけるようにして参りたいというふうに思っております。

小磯先生、西山先生にも引き続き、また部会の中で御指導頂きながら、しっかりとした計画を作って参りたいと思っておりますし、また、皆様方には、計画を作った後、またお声がけをする事があるかと思っておりますので、ひとつ今後ともよろしくお願ひしたいと思います。

本日はどうも有り難うございました。

○小林開発計画課長 本日は、長時間どうもありがとうございました。まだまだきっと皆様方にも言い足りない事があったかと思えますけれども、とりあえず、今日はこの場で締めさせていただきます。

今、局長から話もございましたが、実は計画部会の中でも、計画を作るだけでなく、その後もしっかり監視していく口の悪い応援団になるぞという御意見もあったやに記憶してございます。局長が今言いましたように、こういうパートナーシップ会議、先ほど参事官から説明があったように、これだけで終わらすつもりはございませんので、引き続き色々な形で関わらせて頂ければと思います。

とりあえずは、今日はこれで締めさせていただきます。

それでは、以上をもちまして、北海道価値創造パートナーシップ会議 in 釧路～新たな北海道総合開発計画に向けて～を閉会致します。

本日は、御多忙のところ、多くの皆様に御参集頂きありがとうございました。今日はこれで終わらせて頂きます。